秀家の八丈島に於ける事共

申請ひて、薩州へ下り其家に仕ふ。此近藤は、もと秀家の鷹を好まれし時、鳥見の役をせし者なりしを、取立てられて侍となりしといふ。宇喜多士帳に、近藤六百石と見えたり。黒田・眞田等の名は見えず。

一説には、秀家卿大坂へ出てて、内室に對面ありし事を、肥前守利長卿聞きて、之を言上し、尤も婿なれば、父子の命を乞請けて、遠流せられしともいへど、薩州へ下向といふ事、正説なり。或曰、後年に八丈島へ流されし人の、江戸へ歸りける者ありしに、花房志摩守、此者を呼びて、休福の事を尋聞きし中に、日本の米の飯を、今一度快よく喰ひたきと宣ひしとありし事を、志摩守聞き、落涙に及び、何とぞ彼の島へ米を渡し、休福へ參らせたく思ひて、土井大炊頭の許へ參り、此事を物語あり。何卒米を遣したしと、内々頼ありければ、臺聽に達し、其望に任せられ、年々伊豆國御代官所へ、志摩守より頼にて、米二十俵宛渡されけるといふ。

又備前國大寺村の賣船、難風にて八丈島へ漂着せしに、休福逢ひて、料紙・扇等に詩歌を書きて、其舟子に給ひしを、取り歸りて、今に其所に持傳へたる者あり。備前・美作兩國の主にて、中納言たりし人故、其島にても尊み敬ひけるとぞ。長壽にて、寛永中、八十餘歳にて病死ありし。其子孫今も猶彼島にありといへり。

秀家德川に味方す

金吾中納言秀秋卿へ備前美作を給ふ事

宇喜多亡びて後、慶長五年十月五日、備前國・美作國を、此度の軍功の賞に、筑前國名島中納言秀秋卿へ給ひける。秀秋卿、今度東軍へ味方ありし。始めは黒田如水入道、近國の親みありける故、秀秋卿の臣平岡石見へ使者を以て、秀秋卿、此度内府へ御味方あらば、御家の爲め然るべしと存候。又恩賞の御望あらば、御取持申すべしといひ遣しければ、平岡、早速稻葉内匠・杉原紀伊守へ内談すれば、何れも如水の申さるゝ通り、然るべしとありける故、秀秋卿へ達しければ、之も同意にて候故、返答に、仰下さる通り、内府公の御味方へ參るべし。軍功も候はゞ、宇喜多領國を御恩賞に預りたく候と、内意を申遣しけるとぞ。されども、秀秋卿が大坂へ上り、表向は西軍に加はり、大津の城をも攻落されける。然るに大老・奉行・其外諸將大坂に集りし時、此度、軍利運になりて、恩賞あらん時の國々の割符などありしに、秀秋卿

秀秋岡山城に入る

の名は闕けてなかりしより、怒りて愈〻關東方と心中に思ひ極められしといふ。されども猶ほ家臣の諫をも問はれしに、一統に東軍の御味方然るべしと申しける時、秀家卿返答に及ばず、座を立ちて入られける故、其内心關東方なりといふ事を、一統に察しけるとなり。扨關ヶ原へ出陣、松尾山に陣して、其時に關東方の色を立てて、大谷刑部が備へ鐵炮を打懸け切崩して、東照宮の御陣へ參り謁し奉り、夫より江州佐和山の城乘取る事等の功によりて、兼て所望の趣に任せ、備前國を給ふべき由聞えければ、秀秋卿之を聞き、宇喜多領悉くとこそ思ひしに、備前計りなれば、名島領に高相同じかるべしと憤られける。之を東照宮聞召して、若き人の心得違さもあるべし。さらば美作を添へて西國を參らすべしとて、備前・美作給りければ、十月廿四日に、秀秋卿の老臣平岡石見守、岡山に至り、戸川肥後守・浮田左京亮に出會ひて、城を請取り明くる。慶長六年の春、中納言にも入國ありける。宇喜多領は、備中數郡・播州三縣も加はりけれ共、之は此度自ら減じて、外へ給はりける。一説に、播州の佐用・宍粟・赤穂三郡も秀秋卿に給ふといふ一説もあれど、之は誤りなり。播州一國は殘らず輝政卿に給はる事明なり。中納言秀秋卿入國の後、國の仕置は、稻葉内匠頭・杉原紀伊守勤めける。領分備前・美作兩國の田地の境界を改定め、悉く檢地あり。此時將軍家より御下知ありて、國中の城の砦共多く破却させ給ひ、沼城・富山城等掃捨てられ、只金川城・常山城・虎倉城のみ殘されし。按ずるに、金川・虎倉の兩城も、慶長八年に掃捨てられ、常山城も下津井に移し造られしが、元和元年に、又下津井城も割捨てられたり。又岡山城も、未だ造殘りし所經營あれば、沼・富山等の櫓門など移し造られけるもあり、或は城外に外堀を掘るべき由、東照宮へ言上ありて、北は伊勢宮、西は中山下の外、下は天瀬町の外迄、凡十五丁餘の堀を掘廻し、所々に橋を渡し門を作らる。此事廿日が中に出來し故、廿日堀といふ。其頃播州姫路にも堀出來、其外、國々に此の如き總堀を作りし所多し。之は以前、相州小田原の城攻に總堀ありて、之にて寄手を防ぎける故に、落城に手間取りしといふ事より、所々に總堀をせし所多し。

岡山城改築

秀秋卿杉原紀伊守を誅せらる幷家中騷動の事

金吾中納言入國以後、程なく政道亂れがはしく、只放鷹殺生のみを好み、或は罪な

稻葉父子岡山退去

き者を殺さるゝ事共ありしを、稻葉内匠頭・杉原紀伊守之を諫めける。殊に杉原強く諫言せしを甚だ怒りて、村山越中を仕手に言付けて、紀伊守を討たしむ。先づ其時、杉原に登城すべしとあれば、則ち秀秋卿の前に參る。其退出の時に出會ひて斬るべしと、本丸と二の丸との廊下に越中は控へて待居たり。然るに紀伊守能く申しなだめけるか、秀秋卿の心解けて、杉原を斬るに及ばずと、村山にいへとて、小姓をやられしに、村山に行逢はず。玄關迄求めけれども見えず。其中に、紀伊守退出して廊下を通りける所へ、越中つと出でて、言葉を懸けて切殺しぬ。小姓通りし時、差留めらるゝ事を越中も略ぼ察したれども、常に紀伊守と間宜からざる故、此事を幸と思ひて、物蔭に潛み隱れて、小姓をやり通し、其跡に出てて、終に杉原を誅したり。紀伊守が子加賀も、切腹言付けられて失せにける。杉原父子、斯くの如くなりしかば、稻葉内匠頭、其儘居難く、又禍の至らん事も遠からじと、夜中に妻子・家來殘らず引連れて、岡山を退出し、兼ねて戶川肥後守懇意なれば、之を賴みて、備中庭瀨へ引取る。其頃は、戶川方に宇喜多浪人多く居ければ、四五十人集めて、堀切をなし柵を

瀧川出雲の退去

附けて、岡山より追手來らば、防ぐべき用意し、池田市左衞門・小森三郎左衞門兩人に足輕五十人附けて、白石橋迄迎に出し、稻葉を引包みて、庭瀨に至る。されども岡山より追手もなければ、內匠頭も閑に肥後守に禮謝を述べて、直に兒島の下津井に行き、夫より舟にて、大坂へ赴きける。仕置せし兩人、此の如くなれば、家中大に騷ぎ、松野主馬（後に入道して、道圓といふ）も立退き、主馬組の鐵炮頭蟹江彥右衞門は、虎倉城に居けるが、是も松野に從ひて、城を捨てゝ退去す。瀧川出雲も退去の沙汰あれば、之を押留めよとて、鐵炮頭足輕を連れて出て、其門を堅めけるに、出雲は夫より以前に、女乘物に乘りて、忍びて落ちける。未だ家來は殘り居けるを、出雲未だあると思ひ、鐵炮頭門外に守り居けるが、出雲はや落延びたりと思ふ時分、家來何某門を開き出てて、其鐵炮頭に申しけるは、出雲は、最前にはや退去致し候。家來計り殘り居候。何も障なく御出し下さるべし。されども、出雲家來殘らず逃去りしと申す事、外聞も快からず候間、某は此屋敷に殘り、切腹致すべく候。其元にも、無手に御引取候事も如何に候間、某が首を御取候て、御引取り然るべしといひ捨てゝ、門內

へ又走り入り、松樹のありし下にて、腹切つて死しければ、其外家來は退散したり。其鐵炮頭は、出雲が家臣某が首取りて歸りける。其外にも退去せし者多かりしとぞ。其後は平岡石見守のみ老臣にてありしといふ。

按ずるに羅山文集・擧白集等、金吾中納言の家頽顚の後に、内匠は浪人の由見えたれば、此退去の後に歸參して、再び仕へしなるべし。又松野が退去は、秀秋卿其年伏見へ登られし時、供にて行き、枚方より退去して、後に駿河の忠吉卿に仕へけるといふ。或曰、杉原紀伊守を越中が斬りし所は、今二の丸の臺所にて、本丸へ通る廊下なりし、後迄壁に血の飛びかゝりし跡ありしを、一年の作事に、此廊下は崩取られしとぞ。又曰、稻葉退去せし家は、伊木長門家なり。瀧川出雲退去せし家は、池田造酒家なり。或曰、杉原紀伊守殺されし後、其靈魂殘りけるといふ事ありて、夜中には度々紀伊守が形現はれ見えて、秀秋卿も病氣となりけるが、村山越中登城して居れば、其形顯はれざりしとぞ。日を經て、病氣重りけるに、樣々祈禱ありける中に、蓮昌寺の住僧の祈禱しければ、杉原が形顯はるゝ事止みて、病氣も全快ありけるより、日蓮宗を甚だ尊び、其時迄は、森下村にありし蓮昌寺を、城の西新堀の外に移し、佛殿廣大に建立し、國中無雙の大地となりしは、此時なり。

秀秋の狂體

秀秋卿薨ぜらるゝ事

慶長六年の冬、秀秋卿、牧石の方へ鷹狩に出でて歸りに、龍口山を見やれば、勝れたる蛇大松を纏ひてあり、誰かあの蛇を斬らんとあれば、歩行者一人、承り候とて、大川を游ぎ渡り、彼蛇の居たる松に攀登る。蛇、彼歩行者を松と一つに押纏ふ。其時、抜きたる刀の刃を外へ向けて、身に添ひて持ちしが、蛇の纏ふに從ひ、其刀を外へ張出せば、蛇は寸々になりて死す。歩行者又川を游ぎて歸る。秀秋卿大きに賞美ありしとぞ。其後秀秋卿、折々狂氣の如く常ならざる事多し。或時は放鷹のありしに、俄に、雨降り出でけるに、民家に入り、雨宿りありしに、兒小姓爐にて火を起しけるに、火早く燃えざるとて、脇差を抜き、首を爐中へ切落し、又或時は、民家に入りて、鴨居にて頭を撲ち、大に怒りて、此家を作りし大工を呼びて、成敗せんとありしに、殺

秀秋薨去の流說

生の仕合宜かりければ、召捕來りし大工、入用になし、許せ〳〵といひて歸されし事など、樣々常ならぬ事多かりし。されども老臣、其外も或は殺され、或は退去し、殘りし者もなか〳〵諫言など言出すべきやうもなければ、たゞ其儘にて過行く。愈〻亂りがはしき所行、月日を重ねて相增しけるに、慶長七年十月十八日、俄に秀秋卿薨ぜられし。是は橫死なりしといふ。されども、之を隱したれば、其事一定せず。一說には、鷹狩の時、一人の百姓を斬らんとあれば、甚だ愁傷するを、秀秋卿笑ひて、刀を拔いて、所々疵付けて、之を弄ばれしに、其百姓起つて陰囊を蹴上げたれば、秀秋卿卽死ありしといふ。一說には、山伏の訟事のありしを呼出し、理非を斷ぜず、兩手を切られしに、其山伏怒つて、飛懸り、秀秋卿を蹴倒し、蹈殺すともいふ。又一說には、兒小姓を手打にせんとして、返討に合はれしともいふ。又一說には、西大寺の堂の下の河にては、昔より殺生を堅く禁ぜし所なるに、此卿網して鯉・鮒を多く得て、其歸りに、廣谷の橋の上にて落馬し、薨ぜられしともいふ。されども世上へは、是等の事を深く隱して、疱瘡にて身まかりしと、披露あれば、今も其橫死の實說を傳へ知る者なし。時に年廿三歲。嗣子なき故、家斷絕す。御野郡出石鄕伊勢宮の邊に葬る。其墓の前に、本行院といふ日蓮宗の寺を建てゝ、之を守る。法名を隨雲院秀嚴日詮といふ。其位牌・木像等は、京都東山高臺寺の中、隨雲院にあり。

小早川隆景逝去

秀秋卿先祖の事

金吾中納言秀秋卿の其先祖は、桓武天皇より、十二代後胤土肥次郞實平より出でたり。實平、安藝・備後の守護職を承りて下向し、此國にて、其子土肥彌太郞遠平、相州小早川に住せしより、小早川と稱す。是も亦、父の跡の守護職にて下向し、藝州沼田郡沼田の高山城に住せし以來、代々此城にありて、實平より十六代連續して、小早川繁平に至る。（備後國眞鶴山米山寺、實平以來代々墳墓ありて、今に歷代たり。）此繁平に實子なくて、毛利元就三男を養子として、小早川左衞門佐隆景と稱す。豐臣關白の時に伊豫に封ぜられ、又筑前國名島に移されけるが、是にも又嗣子なくて、木下肥後守家定の子を養子とす。是則ち秀秋卿なり。隆景卿、筑前國名島をば養子秀秋卿に讓りて、古鄕なれば備後の三原に移り住みて、年々昇進し、三原中納言と稱す。慶長二年六月十二日、三原にて薨ず。秀秋卿も左衞門督の中納言に昇進ありし故、金吾中納言と稱しけるが、早世ありて嗣子

なく、土肥・小早川の嫡家、爰に於て永く斷絶して、備前・美作の兩國もあがりにけり。

備前國を池田家に給ひ岡山在城の事

岡山の安泰

慶長八年二月六日に、備前國を池田家に給ひしより、此方、代々岡山の城にましまして、元より四神相應せし勝地に殿作して、國を治め給ひ、理世撫民の仁政下に行れしかば、年月に添ひて國榮え、城下繁昌して、逆亂の起る事もあらず。書記すべき兵災も絶えて、空目の山色枝を鳴らさず。兒島の波も靜にして、國中の四の民は鼓腹しつゝ、此三の里につどひ集り、萬歲を唱へ、盡させぬ御代とぞなりにける。

備前軍記卷第五　終

備前軍記附錄

備前侍の成立・働・武功・高名等の拔羣なる事ども、本書に記し餘せる事を、玆に竝べ抄す。

黑田職隆

黑田官兵衞如水と號す

黑田美濃守職隆といふ人、邑久郡福岡の出生の人なり。年若なる時より、播州へ立越え、御着の城主小寺藤兵衞所に奉公し、其時は只一僕の體なりしが、生付正直にて、武道の心懸人に勝れ、其名高かりければ、次第に取立てられ、頓て小寺の家の老となり、其子官兵衞孝高、又無雙の勇士にて、父子雙びて勉め、やがて同國姬路の城主となり、後は小寺より、宛行ひし所知の外、隣郷を切取り大身になりて、御着の小寺を守護してありしが、後には小寺愚にて、黑田を退け、主從不和になりける。美濃守、年老い隱居し、剃髮して宗圓と號しける。其子官兵衞家督を續ぎ、其子松千代丸といひし十二の年、上方信長公へ、小寺より人質に奉り、又官兵衞孝高をば、有岡の荒木攝津守が方へ、小寺が人質として奪はれ、父子共存命危かりしが、不思議に

難を遁れて、秀吉の播州征伐の時、官兵衞孝高、最初に味方に參り、其後年を追ひて、軍功莫大にして大名となり、是も後剃髮して、如水と稱し、松千代丸は黑田筑前守長政と名乘り、筑前國を一圓に給はり、今に至り其子孫支へ、筑前太宰府の邊に城を築き、福岡と名付け居城あるも、美濃入道宗圓の出生せし所の佳名を取られしといふ。

戸川秀安

戸川秀安の武功

戸川平右衞門秀安の事は、本書に所々之を註す。其子肥後守達安十三歲にて、備前國辛川にて、初陣に高名ありしより以來、働多し。たけ高く大の男にて、力量も人には超え、勇氣ありける。朝鮮征伐の時、文祿元年五月、都への道筋わたりの城を、肥後守も一城守りてありしに、肥後が組頭なりし中島夲助、城外へ働き出でけるに、朝鮮人、之を取籠めて討取りける。之を肥後守無念に思ひ、夲助が弔合戰すべしとて、其翌日、自ら兵を率して、城を出でて、城門の向なる小山の峯に取登り備ふ。朝鮮の兵數萬、其下の廣野に押出して、充滿して備ふ。其時老功の組頭新面伊賀・岡市之丞申して曰、此大勢には當るべからじ、早く城へ引取りて防ぐべしといふ。肥後

戸川又左衞門關ヶ原の働

守（時に廿六歲）がいふ。老功の申す事なれども、今大勢を恐れ、臆病心付いて爰を引取らば、悉く追討たるべし。敵多勢なりといふとも、眞一文字に打入りて駈破り、戰つて引取らば、死地に入りて、却つて生に逢ふべし。爰をば我に任すべしとて、肥後が備へし小山より小在松山へ、旗指物・小荷駄人夫を登せて、同勢の跡に續くやうに見せ、戰兵備へて、小山の高みより圓石を谷に轉す如く、一度に噇と突懸りて戰へば、朝鮮人の跡勢より崩れて、敗北するを追討にす。逃ぐる方に川ありしに、敵を追込め、數百人の首を取りて城に入り、其首を秀家卿の陣へ遣し、實檢に入る。是れ朝鮮人と手始の戰なり。其外朝鮮にて、肥後守戰功多し。されども此戰には、自身手を下せし働はせざりしとぞ。關ヶ原の時は、備前を浪人して關東に在りければ、出陣も小勢なれば、自身の働多し。郷戸呂久の渡りにて、早く川を渡して戰ひ、敵を追ひて討取りける。其時の一番首なり。續いて又鑓を合す時、田中吉政（兵部少輔）の兵來りて、御助け申すといひて、鑓にて傍より進み來る。其敵は十文字を持ち、少し高き所に居て、此方二本の鑓を搦み、突合ふ事手間かゝりしが、田中が足輕之を見て、鐵

炮にて打つべしといふ。田中が侍怒りて、汝鐵炮を打つべからず。之を打たば、汝を先づ突殺すべしといふ時に、敵の耳の下へ、肥後守鑓を突込みて突倒す。田中が侍、其首を取る（初めに、肥後守取りたる首は、石田が内の柏原某といふ者なり。）其時、戸川又左衞門・峯本與右衞門も首は取らざれども、能き鑓を湯原清右衞門も能く働きて、手を負ひたり。近藤勘十郎、（後に勘右衞門、又助之丞ともいふ。）十六歳にて組討す。七箇所迄手負ひて、首を取りて前に抱へ伏し居たり。肥後守兒小姓にて、黒田甲州も見知られし者なりけるが、甲州爰に來り合せて、勘十郎比類なき手柄せしとて、藥を取出して與へ、斯樣の首は人に奪らるゝものなり、若年の事心元なしとて、甲州の家來を附けて、引取らせられしとぞ。峯本與右衞門は、此戰の後、佐和山の城攻の時、兜首を取りて、其兜を後迄家に傳へ持ちしといふ。此戰終りて、肥後守には、宇喜多家にての所知の地高二萬五千石を、備中庭瀨にて給はりて、御家人となり、寛永四年、肥後守六十一歳にて卒す。其子土佐守正安、其子玄蕃安宣、其子縫殿、延寶七年卒す。幼年なる故、其家斷絶す。されども土佐守弟戸川内藏助・其弟戸川平右衞門等の家、將軍家に奉仕す。

浮田忠宗

浮田左京亮忠宗は、直家の弟にて、福岡出生の人なり。富山の城主、後に隱居して、安心と號して大坂に居たりしに、朝鮮征伐の時、秀家卿十九歳にて、總大將を承り渡海ありしに、安心後見すべき由、豐臣大閤命ぜられし故、秀家卿に添ひて安心渡海し、其後程なく大坂にて死す。（其畫像邑久邑村に今にあり。）

浮田詮家の軍功

其子左京亮詮家は、上杉景勝御征伐の時に、秀家卿の名代として奧州に赴き、直に東軍に從ひ、軍功あれば、石見國津和野の城主となり、三萬石新知を給ひ、浮田を改めて坂崎出羽守といふ。其後元和元年、大坂落城の時、天樹院殿を（秀忠卿御娘、秀頼公の室家及本多忠勝の妻）城中より奪取り奉りて參りける。是等の功によりて、又一萬石御加增にて、四萬石を領す。然るに奪取りて參りし時、此姫君を出羽守に下さるべしと、仰ありしに、之を本多中務大輔へ御緣組ありければ、出羽守之を聞いて、大に怒りて婚禮の時、御輿を奪はんと議する由聞えければ、出羽守が家臣へ内通ありて、出羽守を討ちて出しける。是にて事濟み、出羽守は亂氣の由にて、其家斷絶す。其討ちて出せし者の不忠を、又悪ませ給ひて、之も御成敗ありしとぞ。出羽守弟邑久郡大鹿島の住僧にて、感應院といひて、寛永の末

迄ありしといふ。

或曰、天樹院殿、大坂落城の日、城中御出候事は、秀賴公、淀殿の助命を御賴み候爲めといふ。御側女中の外に、大野修理が郎等米村權右衞門は添ひ奉る。其所へ、大和組の內堀內主水といふ者、參りかゝり、御供に參る。然る所へ、坂崎出羽守出會奉り、御供仕り、本多佐渡守陣屋へ御落付なさる。其段出羽守より、東照宮へ言上申し候由なり。さて秀賴公、淀殿生害をば、天樹院殿の御聞に達せず、關東下向し給ふといへり。

岡利勝

岡豐前守利勝、武勇人に勝れし者なり。或時兒島常山の麓に、戶川友林隱居してありし許へ尋行くとて、京橋の邊より、舟に乘りて出でける。又常々懇なる侍を同道す。是も又武功多き者なりしが、川口を出づる時分より、互に軍物語をするに、彼の侍豐前へ申すは、分限の相劣りたる事は申すに及ざるの事なり。されども手柄高名の場數等に於ては、中々我には增り給ふまじと、爭ひて語り合ひける。凡三里程の海上を行程にて、始終軍咄計りにて舟着し、其物語を聞きし人數へしに、雙方共四五十程の場數なりしといふ。其咄相手の侍の名は語り傳へず。按ずるに、此侍國富源右衞門、馬場重助が類なるべし。其名傳はらざる遺恨の事なり。

岡利勝の諫言

此豐前守、文祿元年八月に、朝鮮の陣中にて病死せしが、遠き慮もありし者なり。豐前其末期に、秀家卿其小屋に至り、病を尋ねらる。其時豐前に、何にてもいひ置くべき事あらば、申置けとありしに、豐前答へて、申置きたき事は候へども、とても御用ひあるまじければ、無益なる事と申せば、秀家卿、更に其事は忘却あるまじ。思ふ所包まず申すべしとあれば、然らば愚意を申上ぐべし。某、此度相果て候はゞ、御仕置定めて紀伊守承りて、一人事を計り申すべし。さあらば、御爲めに惡しかるべし。殘る老臣に、紀伊守を思召しかへ給ふなと申しければ、秀家も、其方申す所尤なり。向後申す所愼むべしとあれば、豐前安堵の思ひをなして、其翌日空しくなりけるが、其後果て、紀伊守一人仕置をして、家中爭論起り、終に是より、宇喜多家亡ぶる事になりにけり。

岡越前徳川に從ふ

其子岡越前守といふ。朝鮮陣中にて、家督を繼ぎ、二萬三千石を其儘知行せしが、慶長五年五月、南都に蟄居しありて、關ヶ原の合戰治りて後、戶川を以て、關東へ仕へたき事を願ひける故、御家人に列し、備中江野

にて七千石を給はる。然るに越前が嫡子平内、明石掃部が婿にて、大坂に籠城す。元和元年落城の後、關東より御穿鑿あるに、越前守申すは、平内儀、掃部が婿、其上に切支丹を信じ候故、義絶仕り、浪人の後樣子存ぜざる由を言上す。東照宮聞召し、汝は明石掃部が妹婿なり。平内は又同人が婿なり。近年平内牢人して、大坂に籠らるといふ事、疑はしき所なり。さあらば、急ぎ平内を尋出せよと、御下知ありしに、平内、備中の家士伊賀四郎兵衞所に隱れ居けるが、父越前身代危しと聞きて、同年六月末に、京都へ出でけるを、戸川肥後守に御預け、越前も申分立難くて、父子とも妙國寺にて、七月に切腹ある。平内は切支丹故、望みて首を討たる。次男忠兵衞も江戸にて切腹して、家斷絶す。

岡越前父子の切腹

長船越中

長船越中守は、津高郡虎倉の城主なり。されども岡山に居て、組頭役の石原新太郎、代りて城を守る。此新太郎は、越中が妹婿なりし。天正十六年閏正月朔日に、越中守へ新太郎より使を越して、來る四日、年始の賀儀として、料理を參らす由を言送りける。悦びて謝禮を先づ返答に申遣りて、四日の朝、越中守幷に弟源五郎、家來寺田喜右衞門を連れて、岡山を出でて行く。其外に組侍金光宗迪・河原甚右衞門をも相伴に同道して、晝過ぐる頃虎倉に到着す。新太郎出迎ひ、さま〳〵饗應し、夜に入る迄酒盛し、深更に及んで、各〻己が宿所に歸り、越中守も寢所に入る。翌五日の朝四つ過に、越中守末子幷に源五郎子供など寄集り、碁をうつ。越中守見物し居たる所を、新太郎櫓に上り、矢間より鐵炮を以て、越中守が眉間を後へ打通す。座中の面々周章し、鐵炮の音したる方へ走るもあり、又越中守を介抱するもある所へ、新太郎が嫡子新介、當年十八歲になりけるが、其座へ出でて源五郎を一刀に切斃す。左右に居たる者、卽座に新介を斬殺す。新太郎妻は、長刀を持出でて、越中が留をさし、駈込みて幼少の子供を悉く刺殺し、直に新太郎が籠居たる櫓に取籠る。兩人の家人共、何の意趣とも知らず。互に拔合ひて所々に切結ぶ。金光宗迪・河原甚右衞門・市村某等も下知をなし、何も主人の意趣も知らずして、切合死する事詮なき事なり。思ふに新太郎亂心なるべし。皆靜まれと制し止め、岡山へ此由を告げたるに、暫ありて新太郎夫婦自害したりけん。其矢倉より火燃出でて、折節西

風烈しく、櫓塀に附いて燃上る。新太郎家來石原相馬といふ者は、虎倉村の寺へ行きて自害す。岡山へ此事の註進聞えければ、越中が嫡子紀伊守、裸背馬に乘りて駆出す。家來も是に從ひ、追々大勢馳行きけるに、漸く暮時に虎倉城へ行きて見れば、城郭悉く焦土となる。紀伊守も爲方なく、宗迪・甚右衞門、其外生殘りし家來に、其樣子を尋ね聞きて、越中守幷に源五郎が死骸を取納めて岡山へ歸り、此度紀伊守を招かれけれども、兼ねて不和なりし故、虛病を構へて行かず、其難を遁れたり。新太郎一家殘らず死せし故、其意趣を知る者なし。扨越中が家督をば前の如く、紀伊守に言付けられしが、是は邪智ある者にて、國中之を惡む事甚し。よりて毒を與へて殺す。其子を長船吉兵衞といひしが、其末如何なりし終を知らず。花房志摩守正成父子をば、又左衞門といふ。剃髮して道悅といふ。志摩守關ヶ原の戰の時、大和國に蟄居してありしが、其戰過ぎて御家人に列し、備中國にて七十石を給ふ。宇喜多秀家にては一萬四千石を領す。其子の彌左衞門幸次、朝鮮陣南門の城乘取る時、能き働あり。後には台德院陣軍の使番を勤めける。元和九年六十九歲にて死す。幸次弟花右馬助正榮・其弟花房勘右衞門正盛、皆東照宮に奉仕す。花房助兵衞職之、もとは美作の人なり。其戰功本書に記す。文祿三年、岡山を退去、常州に蟄居。慶長五年より東照宮に奉仕し、備中にて七千石を給はり、御使番を勤む。元和三年六十九歲にて死す。其子花房五郎右衞門職則、文祿三年父と共に常州に蟄居、後父の家督を繼ぎ、元和六年死す。二男花房左衞門職直、東照宮に奉仕す。後に柳原飛驒守といふ。慶安元年死す。職則の子を大膳といふ。

明石飛驒守

明石飛驒守、初めは源三郎といふ。本は浦上宗景の臣なり。宗景滅亡の後、宇喜多の臣となりたりといふ。然るに宗景滅亡以前に、所々合戰の先手等、宗景の臣ながらも、宇喜多に隨ひて、合戰度々其麾下に加はりし者にぞ。其後天神山落城、宗景亡びしかば、宇喜多の臣となりしなり。故に飛驒守が子掃部の時迄、家老の列に入らず、客分のあしらひにて、組士もなかりし。尤も四萬石にて、宇喜多家にて第一の大身なり。是も浦上の時より、持來りし高なるべし。嫡子明石掃部景親、家督を續ぎて、親の時の如く能きあしらひにて、仕置には構はてありしが、慶長四年、宇喜多の老

明石飛騨守切支丹を信仰す

臣皆外へ預けられ、又退去して仕置すべき者なかりしかば、掃部頭仕置をして、關ヶ原の合戰にも、秀家の先手を只一人勉めけるに、關ヶ原敗軍の後、浪人して、備中・播州などに隱れ住み、吉利支丹を信じ、其宗旨を廣めける。然るに慶長十九年、大坂の亂出來し時、城中に入りて一萬計りの大將となり、兩度の籠城をせしが、落城の後行衞知れずなりぬ。世の浮説に、南蠻へ渡りしといふ。掃部が子二人ありしが、之も行衞知れず。數年の後、尋ね出されて殺されしといへり。（景親、初めは三郎左衞門といふ、敍爵して飛騨守になり、後に掃部頭といふ。）

明石宣行

明石右近宣行といふは、明石大和守景行に子なくて、弟を養子にす。則ち此右近なり。大和は、和氣の曾根の城主にて、浦上宗景の臣なりし。右近は直家に仕へ、其儘曾根の邊にて四千五百石を領し、曾根村に住居す。朝鮮陣に赴きて、文祿二年正月、

明石宣行討死

深手を負ひけるが、一兩日過ぎて死す。其幼男久藏に、右近が祿を其儘給はる。其事を明石久兵衞（祿二千石）・小瀬中務（祿千石）より、備前の留守へ言送りける時、右近が伯父明石宗納より、返答せし文今も殘れり。其宗納は、和氣郡働村に隱居して、爰に死す。（宗納が屋敷地の跡、墓も働村に殘れり。）右近が子久藏も、後に右近といふ。宇喜多亡びて後、牢人し、是も大坂に籠城せしが、落城の後行衞知れず。

高取備中

高取備中、之も浦上の臣にて、戸川平右衞門が舅なり。後に直家に仕へ、三千石を領す。其子も高取備中といひしが、秀家卿の母大方殿といふに內緣ありて、後に浮田喜八といふ。戸川肥後守、備前を去りし時、一所に退去せしが、後に歸參し、關ヶ原の戰に討死せしといふ。

延原土佐

延原土佐は、宇喜多家の古老の臣なりといふ。其子內藏助といふ。六千石を領す。關ヶ原敗北の後に、丹波の別所豐後守を頼みて居たり。切支丹の宗旨を信じて、蟄居したり。江原兵庫は、直家の時、作州大庭郡三崎村篠向の城にありて、一萬石を領す。秀家卿の時死す。其子も頓て早世して、家斷絶す。

岡本權之丞

岡本權之丞、祿三千二百石なり。文祿二年六月廿四日に、朝鮮晋州の城を攻む。黒田如水の臣後藤又兵衞、其時龜甲といふ器を制して、是に乘り、石垣の石を刎崩しける時、權之丞一番に乘入り、二番に戸川肥後守乘入りて、城兵を悉く討取り、さまざま逃惑ふ者も谷に陷り、川水に溺れて死傷するもの二萬餘人に及ぶ。城主牧使

徐元禮は、藪の中に隠れ居たるを、岡本權之丞討取りたり。其首を降人に見せければ、疑もなき牧使が首なりといひければ、鹽漬にして名護屋へ奉りければ、太閤大に悅び給ひ、岡本に感狀に羽織を添へて給はり、歸朝して後、又太刀を給ひけり。

國留源右衞門は、八百石にて鐵炮頭なり。浮田侍にて雙なき勇士なり。其手柄高名、本書所々に之を記す。文祿二年正月廿三日、朝鮮にて大明軍五六十萬騎にて出てたるを、之を防戰する事、評定區々なりしに、秀家卿は金の笠の馬幟を押立て傍に立つてあり。後見の浮田安心入道は、南蠻頭巾の兜に、黑具足を着て、茶色の羽織を其上に打着て控へたるが、迚も長僉議を聞きて、無益なり。人はともあれ、宇喜多が勢懸れ〳〵と、秀家下知あれば、戸川・長船・明石等、眞先に進んで駈出づれば、吉川廣家が備は、宇喜多より先にあれば、之を見て、廣家馬を進め、兩使をくりかくる。宇喜多は一足も先へ出てんとして、吉川が備の脇田畠の中を押出す。總軍之を見て、四萬六千餘騎、總懸りに一度に懸りて戰ふ。大明の大軍は、味方の勢を中に取込め討取らんとす。秀家の備の前に小山あり。此山を廻りて、先へ出てなば、大明勢の後陣近く出づべき所と積りて、戸川肥後守、此山を廻りて見れば、案の如く大明勢の後より、戸川則ち大明の後軍より切つて入れば、思ひも寄らざる事なれば、大明勢敗北す。又小早川隆景と立花勢とは、横を入れて追崩して、總懸にて追散せば、大明勢、總敗軍になりて逃げ行くを、追討にして首を取る事夥し。其中に軍吏と見えたる兵、馬に離れて引兼ね居るを、國富源右衞門追付きて、拔打に二打・三打切付くれども、鎧よければ切れず。其儘飛懸り駈付きける。國富もとより大男にて、力も普通の者には遙か越えたりけるが、其敵は國富も猶ほ見上る程の大兵にて、力量も亦强ければ、源右衞門を取つて押へける。之を刎返さんと思へども、其敵の身の重き事、大盤石を横たへたるが如し。爲方なく脇差を拔きて、下より突きけるに、何をか着たりけん、更に通らず。されども此脇差を突張りてありし所へ、源右衞門が若黨來りて、敵を引倒す。重具足を着たれば、早々起くる事ならぬ所を押へければ、源右衞門起上りて、首を討取りける。後に降人に問へば、漢南人の將なり。國富も此時は、危き事にてありし。

馬場職家

馬場重助職家も鐵炮頭なり。岩法師といひて、十三歲の時、初陣せしより、所々の働の事本書に見えたり。天正十五年、筑紫陣の時、日向と豐後との境なる高城に、三原彈正・山田新介楯籠りたるを、大和大納言秀長卿・毛利・宇喜多等之を攻む。宇喜多は、南口より攻寄れば、敵も城より出でて、戸川肥後守と攻戰ふ。其時重助は、谷の方の請手として、谷の間へ行きたり。敵を待てども來らざる事、數刻に及びける故、退屈して嶺に登る。時に敵出合頭に行合ふ。城兵鐵炮を五段に備へ、重助

馬場職家勇戰

足輕を下知し、與力の士を進めて、鐵炮迫合して、一つ・二つ込替へ打拂へと、其儘鑓を入れ、無二無三に突いて懸り、敵を三段迄突破る。四段目の備より打つ鐵炮、重助が右の股に當る。敵仕たりと聲をかくるを、重助、手を揚げ足を踏み、中らずといひて味方を勵まし、四段目の備をも追崩す。五段目の備より鐵炮を放つ。重助心は猛く進めども、股を打貫かれ、血流れて進み難く、崩土手のありけるを楯に取りて、兜の錏を傾け、具足の袖をかざし、敵近付けば討死せんと待つ所に、向の谷の柴打懸けたる陰より、鐵炮を放つ。重助が背割具足の右の肩具柄骨の內より、臂迄打通さる。竹を以て袋を突通したる樣に覺えて、目も暗み心も亂れて、世上朝顏の花の色に見えたるを、きつと心を取直し、目を開けば、田中藤介、谷より登り來り、重助如何といふ。重助、是に氣を助けて、私大事の手を負ひたり。退くとも迚も追討に逢ふべし。爰にて腹を切らんといへば、藤介聞きて、夫は無益の生害、某隨分敵を防ぐべし。早く引取れといふ。重助重ねていふは、此所甚だ危し、中々防ぐ事なるまじ。其方こそ引取りて、重ねての御用に立てよと問答す。藤介甚だ怒りて、某爰を一足も引くまじ。さある程ならば、堅固に防がん事安かるべしといふ所へ、重助が若黨共追々來る故、重助を肩に懸けて退きける。藤介は足輕を猶ほ進め、崩土手を前に當て、待つ所へ、五段目の備進み來るを、近々と引請け、土手蔭より鐵炮を放ち打立つれば、敵猶豫す、其所へ藤介鑓を入れて、終に城兵を追込みて引取りける。重助、此手疵も平癒したれども、手足叶はずにて、力戰ならず。此後は、邑久郡北地

職家の遺言

村に引込み、長命にて、七十七歲にて病死す。其病中に、子供に遺言しけるは、臆病はすまじきものなり。某戰場にて、淺手・深手負ふ事度々にて、討死すべきもの運よ

ければ、此年迄永らへて、今病死するにて、思ひ知るべしといひしとぞ。其子馬場與平次實職、後の朝鮮陣に、秀家卿の供に行き、慶長二年八月十五夜、漢南の城を秀家卿攻めらる。戸川肥後守、東の方を攻めて鐵炮を打懸け、埋草を以てから堀を埋めんと、栗井三郎兵衞・國富作右衞門・岡八右衞門、之を下知す。與平次は、肥後守の許へ行きたるに人見えず。扨は皆城へ乘りたると思ひて、から堀に燒尖りを植ゑたる上に、梯を渡して行くに、向の岸へ一間計り届かざるを飛越し、直に壁を乘越し、西向に飛入り、夫より刀を拔き肩に懸けて、東に向ひて行き、南門に入るとも、敵味方共に見えずして、猶豫ふ中に、敵三騎駈來るを、中の敵を切付くる。されども鎧の上なれば切れず。敵は壁へ轉び懸る所を、又振上げ切る時に、後より味方ぞ味方ぞと呼はる故、刀を引いて退く。其中に三騎共に逃げたり。跡にて考ふれば、其詞を懸けたるは、外の味方の事なり。完甘太郎兵衞と本丸へ乘込みたれども、敵に逢はず。然るに敵四騎馳過ぐるを、討たんとするに、早や味方の者駈合せて討取る。爲方なく蓬の高く茂りたる中に隱れ居たるに、戸川肥後守が弟玄蕃、手を負ひて、肥後守家來は居らざるかと、呼ぶを聞き、與平次、蓬の中より走り出でければ、玄蕃が手を負ひたり。賴むぞといふ。肩に懸けて肥後守が陣へ、伴ひ行かんとする所に、敵六十騎計り群り、二の丸より逃出づ。玄蕃が長刀持ちたるを取りて、敵の中へ破り入りけるに、敵は落武者なれば、皆十方へ逃失せたり。夫より玄蕃を助け、南門の方へ行けば、秀家卿の旗本に、戸川が家來杉山四郎兵衞・本鄉虎八ありし故、玄蕃を渡し、又引返し敵を心懸けたれども、其日は手に逢はざりし。されども朝鮮陣中にて、首を取り鼻をかきたる數、男女老少共に與平次が得たる所、八十餘人に及びけるとぞ。扨慶長五年、關ヶ原にて宇喜多敗北の時は、與平次は大垣に殘り居て、負軍になりしを聞き、漸々引退きて、近江賀茂郡布施村といふ所の百姓を賴み、二十餘日を過ぎて、七右衞門といふ百姓、大坂迄送りくれ候て、備前へ歸りて隱れ居たるが、後に池田家へ出仕へて、其子孫今にあり。

中吉與兵衞

中吉與兵衞も祿千石にて、鐵炮頭なり。小田原攻の時、秀家卿の攻口は、湯本の北尾首山といふ出崎の山なり。戸川肥後守、先手にて備へけるが、此山の尻を乘り越

ゆれば、城甚だ近くして出で難し。又出でざれば、城へ鐵炮を打懸くべきやうなし。されども諸手の攻口隙なく、鐵炮を打懸くれば、玉音なきは、油斷して攻めざるが如くあれば、與兵衞下知して、用には立たざれども、城の方へ向ひて、空ざまに百挺の鐵炮を絶えず打出しければ、大閤の本陣へも聞えて、油斷なく城を攻めて骨折りとて、樽肴ども給りける。其時與兵衞、功者なる事をせしといひける。

安藤少七

安藤少七も六百石餘りの祿にて、手柄高名の場數もありて、小田原の時、戸川が手にありて、尾首山より攻むるに、井樓を組み城中へ大筒を打懸け、又金堀を備ひて、城中へ穴の中にて鑓を合せ、安東少七、敵の鑓を切折り、吾鑓も折れて引取りける。文祿二年、朝鮮陣あんさん郡にて、戸川が手より、國富右衞門・屋守四郎兵衞・小野田與九郎一組、大澤半大夫・長屋總左衞門・吉村八右衞門・安東少七一組にて、張番に出てけるに、敵寄來りて攻合ひ、又味方亂妨に出でたる者、敵に追はれ難儀に及ぶ所、鐵炮を打立てゝ敵を打取り、少七も踏止り、殿して引取りける。又ちんしゆ落城の時、敵引退きしを、少七追懸け候所、其先に秀家卿の旗本備へられし故に、敵も爲方なく引返し、少七へ向ひ弓にて懸るを、鑓にて渡り合ひ、手を負ひながら鑓にて突きけるに、敵脇へ飛びける勢に、少七鑓を突折る。秀家卿の目前の事故、持鑓の片鎌なるを給ひける。後の朝鮮陣漢南の城、八月十五夜落城の時、戸川肥後守手、一番に城へ乘入り、矢倉に敵取籠りあり。されども肥後守が勢、方々へ働きて、人なくなりければ、少七只一人、矢倉へ切入りけるに、肥後守も鑓で切入りて、數人討取りける。其外朝鮮にて、場數ありといふ。慶長五年の伏見城攻に、松丸一番乘は、少七なりし。宇喜多家亡びて後、池田家へ仕へて、今に子孫あり。

小瀬中務

小瀬中務も祿千石にて、心ばせもありしといふ。宇喜多家亡びて浪人し、剃髮して甫庵といふ。信長記・大閤記を記せし者なり。惺窩先生の門人なりしといふ。惺窩も秀家卿・秀秋卿の時、岡山へ暫し下り居られしとぞ。

稻葉内匠頭

稻葉内匠頭は、小早川家の家臣にて、秀秋卿の時は、第一の老臣なりしが、本書にも記せし如く、内匠頭、岡山を退去ありし時、之を留めんとて、兵を出して支へられん事を恐る。其中にも、騎士の將なる笹地兵庫、勇氣なる者にて與士にも、又剛強な

稻葉內匠岡山を退去す

稻葉內匠頭妻の素性

る者多し。其上稻葉と、年頃睦しからざる故、內匠も是に敵しては、身の害あらんと思ひ、其時兵庫を呼びて、今度岡山を退かんと思ふ。然るに、若し足下出でて吾を支へば、退くべき方なし。されば某が存亡は、足下の所存にありと賴みければ、筱地、之を承諾しけるとなり。其外、內匠に力を合して、一所に退く者も其家に來りて、見送る者も多くて、何の難もなく、庭瀨迄退きしといふ。（一に曰、後歸參して、秀秋卿家衰亡せし後に、浪人すといふ。）後には關東の御家人となり、大名となられたり。內匠頭妻は、明智が臣齋藤內藏助が娘なり。其母稻葉一鐵の娘にて、明智亡び、內藏助討死の後、其娘を連れて一鐵の方へ歸りける。其娘を內匠頭呼取りて、男子出生す。是れ丹後守正勝なり。此內匠の妻勝れて嫉妬深し。然るに內匠、妻を京都より呼寄せて、是にも子出生す。されども之を妻には隱して別の屋敷にありと聞き、それにては外聞も宜からず、此屋敷へ呼寄せ給へ、少しも苦しからず。又男もありと聞えし。是又此方にて養育すべしと、最も懇にいひし故、能くも申されしとて、內匠も悅び、別屋敷より呼寄せて、內匠妻に目見して、又懇に申されければ、妻も安心してありしが、一日內匠の

內匠の妻後に春日局と云ふ

春日局、竹千代を立てんと家康に訴ふ

留主なりし時、其妻を間近く呼び、刀を拔きて、只一打に切殺し、兼ねて用意ありて乘物に乘り、裏門より出て上方へ登り、里に歸りける。其後此妻、江戶の御內所へ出でて勉めけるが、慶長八年、御誕生ありし竹千代君（家光公）御傅になりけり。後に春日局といひし、則ち此人なり。夫より程なく內匠頭も召出され、御家人となりけるに、竹千代君に御家人御目見の時、春日局抱き奉る。內匠頭も出でける時、東照宮仰に、此女は、內匠は知りたるものなるべしとありければ、只平伏してありしに、之をば吾に得させよ。其方には相應の妻を世話すべしと、仰せありける故、內匠も有難しと御請申して退きけるとぞ。其後、山內對馬守娘を緣組せられき。扨竹千代君、未だ御幼少の時、御弟の駿河忠長卿を、將軍家御寵愛重くして、御世をも此御弟に讓らせ給ふべき程に見えければ、春日局、大に之を歎きて、熱海に湯治するとて、御暇を願ひ、密に駿府の御城に參りて、此事を大御所へ委しく訴へ申しければ、聞召屆けられて、重ねて江戶へならせられ候時、竹千代君を重くもてなし給ひ、殊の外御奔走あり。御弟の忠長卿をば、遙に隔てゝ疎々しく、御言葉も

懸けさせられざる程にせさせ給へば、是より將軍の御あしらひも變り、其外附き奉りし人々も、竹千代君を重んじ奉る事大方なく、終に將軍に備らせ給ふ。斯かる事を家光將軍聞召し、吾將軍になり、世に知る事も、此春日局がよく謀ひしによる事と思召して、此局をいと懇に召遣はれけるより、內外も分かず、諸家より、此春日局をかしづき重んずる事、此御時に竝ぶ者なき勢なりければ、其子婿なりける稻葉も堀田も、兩家ながら高祿を給ひ、重き家となりけり。其春日局の、初め內匠の妻を切殺せしは、岡山の城內目安橋の屋敷にての事なり。今の伊木長門が家なり。

堀田正則

備前津高郡岡田賀茂出生の人といふ。其初、稻葉內匠頭に仕へ、五百石を領せり。堀田勘右衞門正則は、此勘右衞門に、內匠の妻腹の娘を妻に遣す。腹違なれども、春日局の婿分なる故、將軍家の御家人となり、四百石を給はりけるが、御書院番に入られ、水野隼人正忠淸の組にて、大坂の役に高名ありし故に、三百石の地を加へられ、七百石を領せし。其子堀田加賀守正盛、段々御取立にて、十五萬石の地を領し、其子筑前守正俊、又御取立にて、御大老の職迄勉めらるゝ事、類少き立身なり。皆其初めは、春日局の

筋目なり。

平岡重定

平岡石見守重定は、金吾秀秋卿へ豐臣太閤より、附けられたる家老にて、三萬石を領す。夫故に始終秀秋卿を諫めて、其家を治めたり。其家騷動し、老臣等皆退去せし時も、其家を動かず。秀秋卿薨じ、家斷絕の時迄ありて牢人しける。其忠義を東照宮も感じ給ひて、召出され、濃州德野といふ所にて、一萬石の地を給はりけるが、其子石見守代に亂心し、法外の事共ありければ、領地沒收せられて、其子市十郎に、二千石の地を新たに給はりける。

上田土佐

上田土佐は、秀秋卿の鐵炮頭なり。稻葉內匠頭、退去を催し居ける時、斯かる事ありとも知らず、其家に尋問しけるに、主の內匠に同意の者共多く集り居て、土佐が來りしを大に悅び、主と浮沈を共にせんとてこそ來り給ひけれ、其姓名を此一統の中に記しつけんといふ。土佐之を聞きて、是は只常樣の音信にてこそあれ、さらに其心にあらず。右傍輩の親みにて合力する事も、尋常の習はしなれども、是は其賴にあらず。今君に背きて、國を退かんとする人に心を合して、君へ忠をかくべき理な

し。内匠、此座にあらば、刺違へ死すべきものをとて、座を立ち、内匠へ荷擔せし諸士竝み居たるを、睨み迴して立歸りけるとぞ。

村山越中

村山越中守は、金吾中納言に仕へ、老臣杉原紀伊守を城中にて成敗の時、仕手をせし者なり。其後間もなく岡山を退去す。船に取乘り大坂へ退くとて、なへが浦（岡山の邊に、なへが浦といふ所を聞かず、記し誤れるにや）といふ所に船を引付け置き、追手の來るを待付け、弓射る者を脇に置きて、射拂ひ射殺して、船に打乘つて退きにける。其後又、備前宰相の御家に仕へて、大坂の役にも手柄共ありしが、せめ馬の場にて口論をし出して、相手を殺して退去し、加賀の前田家に出てて、五千石を取りてありしが、此越中手强なる計りにて、何の分別もなく、大口者なりし。人の事を惡口する事など多し。

村山臼井の確執

又備前宰相の侍に、臼井十大夫といふ者あり。大の男にて、長六尺に餘り、力も十人を合せたるといふ程なりし。加賀にて此臼井を譽めたる者ありけると、村山聞きて之を妬みて、臼井を大に誹謗す。此事を臼井、傳へ聞き憤りける折節、加賀の黄門の供して、村山伏見に上り、臼井も亦此に行逢ひければ、悅びて其事を文にて、村山方へ言ひやりけるに、夫は僞なる由、臼井へ返答して事濟む。もとより以前傍輩にて、馴染なれば、互に贈物ども取交し、出會物語などして、雙方國に歸りけるに、又村山、加賀にも傍輩に語りけるは、臼井遺恨がましき文を、此の如く書きて越したるに、此方より手强なる返答に及びければ、とかくいふ事もなく、音信などして、追從せしなど又惡口せし事ありし。之を臼井聞きて、今は堪忍ならずと思ひ居ける所に、

臼井、村山を殺害す

越中又加賀を牢人して出てけるに、以前より池田備中守懇意にてありし故、備中松山へ行きける。之を臼井聞きて、其歸る時を待ちて、打果さんと心懸け居て、歸る日を聞定め、完甘の山際に出てて待受け、使を立てゝ、斯くといひやるに、其家來聞き、是は越中にてはなし、御聞違ひなるべし。病人なりといひて通らんとするを、臼井言葉をかけ、越中臆したるかといひて、乘物舁きし者を、拳を揚げて打ちければ、大力に打たれて、目くるめき倒るれば、乘物を地に落しける。其時、越中乘物の戸を開き出る所を、又詞を懸けて斬殺しける。此騷を聞きて、其邊の百姓共多く出てければ、村山が家來、皆取々に逃行きて、事濟みたり。村山が妻、後に江戸御城中

に召仕はれ、此事を歎き訴へけれども、事もなく、又其子其時は幼年なりしといふ。後迄も仇を討つ事もなく、臼井終に何の難もなかりけり。

一説に、龍口にて、金吾中納言の蛇を切らせたりし歩行の者といふは、此越中が、未だ歩行の者なりし時の事と雖も、杉原紀伊守を殺されし時、此越中仕手をせしなり。此龍口の事は、夫より後の事なればいぶかし。又一には、越中は備前宰相の歩行の者より、取立てられしと書きし者もあれど、是は猶ほ誤なり。

河田八助

河田八助も、金吾中納言に仕ふ。是は備中國賀茂潟の細川家より出てし者なり。勝れたる大力なりし。天正十八年、豐臣太閤小田原攻の時に、三月廿九日、沼津の宿にて太閤諸手の人數押を見給ふ。然るに、小早川家勢の中に、大指物さしたる者一人、十八端の母衣懸けたる者一人あり。使番を遣され、其名を問はしむ。御大將の仰の由を唱へて、其名を問ふに、返答に及ばずして押通る。使番、詮方なく歸りて、其段言上す。太閤仰に、馬上ながら其名を問ひしならん。此の如く大指物を差し、大母衣を懸けては、如何樣の能き士にても、馬の拵へぬ所に、必ず歩立なる者なり、左樣なる士に、下馬せずして名乘れといはんに、いかでか名乘るべし。禮を知らずと、餘人を遣さる。此度は下馬して、其名を問ひければ、大指物は河田八介、大母衣は猶崎十兵衛とぞ名乘りける。此八助、秀秋卿の家斷絶の後に、牢人して備前宰相の家に仕へ、大坂の城攻に、鐵の楯を城中より大筒にて打倒しけるを、八助出てて唯一人、其楯を引負ひて、取つて歸りける。敵も味方も、八助が勇力を見て、目を驚しける。

戸川達安殉死に不同意

或曰、宇喜多直家病重くなりて、侍臣を呼びて、殉死すべくや否やを尋ねらるゝに、皆君恩の重く候へば、之を報ぜんには、黄泉の御供申すべしと答へければ、直家悦び、其約をせし驗にとて、皆盃を差し、其姓名を記して、我れ死したる時、棺中へ入れよといはれけるに、戸川肥後守達安、其時は年若にて、助七郎と申しけるが、終始兎角の答もせでありし所、直家申されしは、皆殉死せんとあるに、汝は如何と問はれければ、某未だ若輩に候へども、君の御先を奉りて、堅を破り鋭を挫く事は、其職にて候へば、仕るべく候。此座にて面々、皆是に相同じ思ふ事にて、此時、臣等が命を奉る時にて候へば、殉死の事は、某はなか〳〵存も寄らざる事故、兎角を申

上げず候。之を求め給はんに、黃泉の境をよく存候僧の引導するには、誰かまさり申すべき。常に信仰まします日蓮宗の僧こそ、一番に殉死して御用に立つべけれと申しければ、直家、此事は我が誤なり。此事極めていぶかし。汝がいふ所尤よしとて、殉死を強ひらるゝ事止みにけりといふ。此事極めていぶかし。直家病死ありて、能く家臣共之を慕ひ、皆自害して失せなば、十歲にも及ばざる八郎をば、誰ありて之を助け、國を治め敵をも防ぐべくや。此考辨なき直家にあらず。されば絕命の後、外へは死を深く隱すべしと言置かれし程の事にてはありけり。家臣の殉死を止むべき爲めに、兼ねて助七郎に此事を示し合せ、かく言出せし謀にや。又考ふるに、直家の墓も位牌も、皆天台寺の平福院にありて、日蓮宗を信ぜられし事を聞かず。秀家卿も、日蓮宗をば惡みて、家中へも其宗を改むべしと、言付けられし程の事なり。金吾中納言は、日蓮宗を信じて、蓮昌寺を再興せし人なれば、若し此人の事を傳へ誤れるか。是のみに限らず、宇喜多と小早川と兩氏の事を混じ、誤り傳へし事ありて、稻葉內匠頭を、宇喜多の臣と記せし類多し。

秀家、小田原と和睦

或曰、小田原攻の時、宇喜多秀家卿の攻口をば、岩槻の城主北條十郎氏房、之を守る。一日城中へ矢留を乞ひて、使者を以て、南鄉の酒三荷・鯛十尾を送りて、城を守る勞を慰め給へと言遣りければ、城中よりも、伊豆の江州酒を送りて、屢々使を通じ、其後は秀家卿、氏房に對面ありて、懇に物語共あり。和議の事を催され、秀家卿申されしは、和議も調ひ候はゞ、共に甲冑を解きて、好會をなすべき者をと、色々言語らひて、漸々和議調ひける。小田原の和睦は、夫故此秀家卿の謀計に與るといへる事あり。按ずるに、此卿、此時年僅に十六歲なるが、此和議を計らひて、氏房へ言解るべき年にあらず、不審。若其臣岡・長船・花房等が類、城中へ入りて、氏房に言語らひし事のありしか。此時戸川達安が助七といひて年若なり。又東國の大名に、北條家へは親ある人多かるべきに、遠國の馴染もなき秀家卿をして、此策を太閤の命じなさしめし事も、不審なきにあらず。故に此二條爰に記して、後考に備ふ。

備前軍記 附錄 終

備前常山軍記

三村と浮田の確執

抑備前國兒島郡常山落城の由來、委しく尋ぬるに、其頃の城主三村上野介高德とて、代々源家忠幸の武士なり。又、備中國松山の城主三村修理亮元親と申して、高德の從弟、妻女は、元親の妹なり。此度一族謀叛を企つる事、謂れあるなり。元來元親の父備中守家親、備前國浮田直家と不和にして、威勢を爭ひ、度々合戰に及ぶ所、終に勝負も見えざりしに、結句作州の內、家親へ歸伏ある故、家親出馬して、作州數箇城攻落し、既に佛敎寺まで攻入りしに、浮田一族發向して、家親を討取り、家親の嫡子元祐、さい田の城にあるを討取る。然らば當家の大敵、何卒して、浮田を討ち給ひける鬱憤を晴さんと、元親も高德[もノ一字脱カ]、日夜心を碎きける。其時の將

義昭西國

軍、鎌倉等持院尊氏十四代源義昭公なり。義昭公は、三好の爲めに討たれさせ給ひし故、密に都を忍び出でさせ給ひ、尾張國織田信長を御賴みあり、別心なく賴まれ、

大軍を以て、路次の敵を切崩し、二度都へ移り奉ると雖も、都には、家老村井長門を据置き、仕置をさせ、萬事義明公思召す儘にならざる故、何となく御中不和にして、洛の住居も覺束なく[きカ]御身になり給ふ故、西國へ御下向ありて、備後の鞆津に御座候て、毛利家を御賴みありければ、不審なる儀とは思ひながらも、代々の御家を敬ひ奉り、據なく賴まれ參らせ、近國を催しけるに、御下知を背くものなく、悉く武命に隨ひ、御歸洛ある由聞えければ、信長驚き、安からぬ事どもなりとて、元親へ使者を立て、密に申遣すは、此度將軍へ隨はず、西國往來通路を差塞ぎ、上洛を防ぎ、當家へ忠節あるに於ては、頓て信長大軍にて出馬して、中國筋を追伏せ、本望を達し、備中・備後兩國の分は、元親支配たるべし。其上何事によらず、末代如才あるまじと、堅く誓紙を以て賴まれければ、元親一類集り、願ふ所の幸なる哉、此度將軍へ力を合せ、都へ本意有るとても、人並の儀にて、分けて忠にもなるまじ。殊更、浮田も御催に隨ひなば、我身鬱憤達せん事叶ひ難し。無益の事とても急ぎ、當家は引換へて運の末なり。將軍を討ち奉り、信長へ忠勤を勵み、助力を以て宇喜多を

亡し、數年の無念、此時に達すべしと、各評議極まる。中にも成羽の城主三村孫兵衞尉義成・嫡子孫太郎義兼、曾て此儀に與せず、父の恩を報ずるに、他の力を賴まんや。凡て武士の道は、忠と孝とに極りて、仁義を旨とせば、譬ひ君たらずといふとも、臣たるべきは、天地の道たるべし。信長、時の難を遁れんとて、當家を語らふ。虎狼の謀に隨ひ、將軍家へ敵對し、一家末代、不義・朝敵・逆心の名を得ん事ぞ口惜きなり。信長初めは將軍の威勢を藉り、御城内を隨へ、後は將軍を輕んじ奉り、終に敵を追出す。逆心の働き、我儘奉る振舞、人たる法にあらず。斯樣の人に賴みを懸け、無益の事に候と、義理明に諫言す。良藥口に苦く、金言身に逆ふとかや、元親を初め、舍弟宮內少輔・上田孫次郎に至る迄、承引せず。當家運を開くべき時來りぬと存ずる所に、一族の身として、忽に飜し、奇怪なる次第なり。若し利運なり難くば、兼ねて覺悟の所なりとて、以の外に立腹す。親成父子力なく、はう〳〵成羽に歸らるゝ。其外に有合ふ諸侍、兎角親成呼返し、一家和睦ありて然るべしと、色々意見申せども、元親一向同心せず。所詮斯樣の臆病者、味方にありては勝利なり難

松山城合戰

し、同心せぬこそ幸なれといひければ、高德申す樣、尤も彼等同心せぬを、其儘に差置かば、將軍家へ讒奏し、逆寄せにするは知れたる事。先づ信長に訴へ、加勢を乞ひ、手合に成羽の城を攻落し、義成〔親カ〕父子に腹切らせ、夫より浮田を討亡し、西國往來差塞ぎ然るべしと申さるれば、此儀尤も然るべしと、急ぎ信長へ使者を立て、軍の用意と聞えしかば、苦々しくこそ見えにけれ。是は扨置き、三村孫兵衞尉父子、成羽の城に立歸り、易からぬ事と思ひながらも、一族の讒奏もなり難く、捨置かば、元親・高德、攻來るは必定なり。如何はせんと思ふ所へ、將軍より密に御賴の催あり。是れ天道の御惠と悅び勇み、御請申し、先づ松山を攻むべしと、頓て勢を乞へば、藝州・備後の兩勢、都合七千三百餘騎、天正三年五月廿四日午の刻、松山へ押寄せ、鯨波を揚げにける。城にも、兼て期したる事なれど、今や押寄せ來るべしとは思ひも寄らず、漸く手勢百騎計り、九牛の一毛にも足らざる小勢、爰彼に討散らされ、舍弟宮內討たれければ、元賴は、妻子諸共夜に紛れ、何國ともなく落失せけり。明くれば廿五日

常山合戰

早天に、寄手は城内に亂入りて、見れば早や大將は、行方知れずあり。殘る者とては、昨日の軍に深手負ひし軍兵、半死半生七八騎、前後を忘じ伏し居たり。城外には、討たれし死人四五騎、此外、犬猫さへもあらざれば、城に火を懸け、成羽の城へ凱陣あり。其後、同廿八日、元親阿部山にある由聞えければ、藝州勢押寄せ、同廿九日討取る事、將軍へ註進申すなり。是より高德を亡すべしと、成羽にて諸軍勢を催し、同六月四日、常山へ向はらるゝ。大將三村孫兵衞尉親成、二千餘騎にて、彥崎に陣取り、嫡子孫太郎親亮は、宇野津迫川に陣を張り、一千三百騎にて向はるゝ。小早川伊豆守光重は、山村に陣を取り、一千餘騎を二手に分け、前備は豐岡迄攻寄せける。浦野兵部尉宗勝は、二千餘騎、用吉より、宇藤木賦り岸根に旗を擧げ、相方相圖の鬨を合せ、同六日辰の刻、大手の木戶より亂れ入り、二の丸に攻寄せ、鬨を噇とぞ擧げにける。高德少しも騷がず、命を助からんと思ふ者こそ、鯨波の聲には驚くべけれ、明日の辰の刻には、大矢倉にて一類諸共腹を切り、名を後代の記錄に留むべしとて、靜まり返つて居たりけり。城に鬨を合せざるは、いか樣小舟に乘り、島渡りなどせば、攻口油斷となるべしと、麓の茂會路に火を懸け、逆茂木をかなぐり捨て、喚き叫んで攻入りけり。高德立ち出て、多年某、藝州に對し鬱憤ある故、元親謀叛の張本は某なり。元親無下に生害に及ぶ、我れ生きて何の面白かあらん。一日も早く死地に赴くべしとこそ思へ、いで〳〵最期の働き見せんとて、鎧投懸け腹帶締め、きやうもんのしのぎを疊みて鉢卷し、鐵炮追取つて廣緣に踊り出て、二つ玉にて透間なく放ち懸くる。嫡子源五郎高秀は、平生の强弓を好み、銀のつゝ打つたる弓を射る。是も亦鐵炮を放ち、舍弟小七郎高重は、三人張に十三束三伏取つて引締め、差詰め引詰め散々に射る。三人の飛道具にて、射らるゝもの數を知らず。此手勢に氣を呑まれ、其日の陣を引きにけり。七日の曉に、城內酒宴の聲聞ゆる。多くは女性の聲にて、互に別れ惜しとぞ思はれける。同辰の刻、敵陣に向ひて一類に告げければ、人々我先に出合ひたれば、高德叔母五十七歲、先づ一番に自害せん、我れ世に留りて、斯かる憂目を見る事も、前世の業因淺からず。高德藝州に遺恨を含み、入道せられし事、他にも世にも物憂く思ひしに、腹切るを見るならば、目くれ心も

三村高徳の子自盡

暗むべし。暫時も跡に殘らんよりも、先達つて自害遂ぐべしと、縁柱に刀の欛を卷付け、其儘行當り突きける。高徳、走寄り、逆罪恐しく候へどもとて、御首を打落す。嫡子高秀、生年十五歲、父上の御介錯仕り度候へども、少年故、跡に殘るは御心懸りに思召し給ふべし。逆にては候へども、御先へ腹仕るといひければ、高徳聞召し、扇子を開き煽立て、我子ながらも神妙なりと、顔をつく〴〵打眺め、盛も待たぬ花紅葉、今朝の嵐に散果つる、哀れ墓無き世の習と、暫し袖をぞ濡さるゝ。高秀も俱に涙に咽びしが、三途の先懸仕ると、押肌ぬぎ、腹十文字に切れば、高徳立寄り首打落し、二男八歲になりけるを取つて引寄せ、二刀刺通し押伏せたり。高徳の妹に、十六歲になり給ふ姫君あり。是は藝州鼻高山の大將は高徳の弟なり。此姫是へ退き給へと申されければ、思寄らざる事なりとて、老母の貫き給ふ刀にて、乳の邊を突貫き、同じ枕に伏し給ふ。高徳の妻女三十三歲になり給ふ。男子に超えたる勇なり、我れ武士の妻となりて、最期に敵一騎も討たずして、闇々と自害せん事、口惜しき次第なり。三好が從弟叛逆の一類たる身、女たりとも一軍せて叶ふ

高徳の妻奮戰

まじと、鎧取つて差上げ、帶締め、三尺七寸の刀を帶し、丈と等しき黑髮を打亂し、三枚甲の緖を結び、紅の薄衣上に打懸け裾引上げ、腰にて結び、白柄の長刀小脇に搔い込み、廣庭に踊出で給ふ。春日の局、其外女房・下婢に至る迄、皆々續いて飛んで下り、こは如何なる御事ぞや。さなきだに、女は罪深く、成佛せずと承る。殊更修羅の業は、いかで免れ給ふべし。たゞ留り給ひ、心靜に御自害遂げさせ給へやと、鎧の袖に取付けば、から〳〵と打笑ひ、御身達は女性の事、何國なりとも一先づ忍び給り、自らは邪正一女と觀念し、此戰場を西方淨土として、修羅の苦も、極樂の營と思へば、何か苦しかるべきと、袖振切つて出て行き給へば、とても散るべき花ならば、同じ嵐に誘れて、死出三途の御供せんと、髮解亂し鉢卷し、此處や彼處に立て置きし、長柄の鑓を提げ、三十四人の女房、我先きにと駈出づれば、累年厚恩の家僕八十三人、死を一等に極めんと、我れ劣らじと駈出づる。敵此有樣を見て、城内妻子を先立て出づると見ゆればとて、差控へ居たる所に、小早川の先陣浦野兵部宗勝七百餘騎の眞中へ駈入れ、大將宗勝下知していふ、城内女人に樣を變へ、

寄手を欺くと覺えたり。是虎女の如し、計略孫子の祕する事、侮つて不覺取るな者共と、陣を堅め押へしかば、敢て破るゝ事もなし。勇士死を一等に輕んじ、一面につゝたつれば、寄手足を亂し、討たるゝ者數十人、疵を蒙る者數を知らず。此勢に乘じて高徳の妻女、腰なる銀の采配取出し、眞先に進んで駈破れ者共と、大勢に懸合ひ、息をもつかず戰ひける。流石宗勝武勇を嗜めども、女に向ふ者もなし。城中の兵者共、面も振らず戰へども、多勢に無勢叶はゞこそ、殘り少なに打たれけれ。妻女今は是迄と、大將兵部が馬の前に駈向ひ、勝宗は西國に名を得たる勇士とかや、我れ女なれども、一勝負仕らん。其處引き給ふな浦野殿と、長刀を取り水車に廻し、只一文字に懸り給ふ。宗勝引き退り、いや〳〵御身强きにもせよ、女性なれば相手にはなり申さず、高徳と勝負決せんと、いふ内にも横合より、雜兵四五騎薙伏せ、薄手負ながら、其處退き給へ人々と、腰なる太刀を拔出し、是は宗重代の國平が作りなり。當家より父家親に參らせし、祕藏他に異なりしが、重代の由聞及び、遺し置きし太刀なれば、父上に添ひ奉ると、身を離たず持來りしが、死後には宗勝に

參らする。後世弔ひて給はれといひ捨て、城に懸入りし有樣、喜見城を守護し給ふ時、吉女天女諸共に、修羅を攻め討つ勢も斯くやと計り、見る人舌を卷きにける。斯くて西に向ひ手を合せ、我れ西方十萬億土の彌陀を賴むにあらず、己心彌陀・唯心の淨土、今爰に理せり、佛も如洛亦如電と說き給ふ。寔に夢の世に、哀れ身の面影、露に宿かる稻妻の、早や立歸る本有の城、南無阿彌陀佛と念佛し、元の太刀を銜へ、俯しになりて失せ給ふ、例少なき女性なり。高徳も西に向ひ、南無西方彌陀如來、今日娑婆の苦を遁れ、本國に立歸り、一族の者共、同じ蓮に迎へ給へと念佛し、腹十文字に搔切れば、舍弟小七郎介錯し、其身も自害し、高徳の死骸に倚懸り、同じ枕に伏し給ふ。見る人淚を催しける。頓て數多の首共、備後國鞆津へこそは送りけれ。凱陣あるこそ目出度けれ。扨備中を平均し、各〻功の淺深に隨ひ、毛利家の大將たり。扨て常山へは、藝州よへ、城番として山本四郎左衞門・渡邊伊豆兩人を居ゑ置き、其後城主極り、戶川肥後守、知行五萬石、入道して祐林といふ。

常山三百石廻り四十二町

丸數十四丸

一表丸　土倉兵庫　二ノ丸　池田利兵衞　三ノ丸　津島九郎左衞門　四ノ丸　近藤四郎左衞門　五ノ丸　戸川助左衞門　六ノ丸　近藤杢　七ノ丸知行千石近藤佐吉

二裏丸

一ノ丸口　虫明惣右衞門　二ノ丸　飛山藤内　三ノ丸　師子洞吉左衞門　四ノ丸　横井意仙　五ノ丸　田中藤之介　六ノ丸　國富源左衞門　七ノ丸知行三千石中島九郎左衞門

備前常山軍記　大尾

佐々成政隈部を攻む

肥後隈本戰記

一、佐々陸奥守殿、肥後國へ入部候て、國侍どもに仕置等之ある所、菊池郡の內を鎭地致候。隈部と申す侍、陸奥守殿下知を、承引致さゞるに依つて、隈部退治の爲め、三千餘の人數を差向けられ候所、隈部も、兼ねて覺悟致し、二千計りの人數にて、能き要害の地へ楯籠り候故、卽時に退治なり難きに付、其旨、陸奥守殿へ註進致し候へば、翌日早々、菊池へ出張候て、旗本の勢も、城を攻め候勢に差加へ、近習の者二三百、弓鐵炮纔か四五十挺にて、城中よりは引退いて、陣取り御入り候所、隈部が嫡子、山鹿郡の內、領地仕り候有動と申す者の家を繼ぎ、山鹿郡に罷あり候が、陸奥守殿、隈部退治の爲め、菊池へ出張の由承り、三千餘の人數にて、菊池へ罷越し、陸奥守殿本陣近き所迄參り、使者を以て申入れ候は、御出張の由承り、御先をも仕るべき爲め罷出て候。一方の攻口、仰付けられ候樣にと申入れ候。陸奥守殿御聞

隈部降參

き候て、有動が樣子、心得難き事と思召し、攻口の事、是より申すべく候條、其方に之あるべき旨の返事なり。有動、此返事を聞き、扨は隈部我等父子の儀、陸奥守殿御存知と相見え候。幸唯今、陸奥守殿旗本に勢も之なく候。能き時節にて候と、同勢にて下知を致し、前に之ある川を渡し候體を、陸奥守殿御覽候て、此方の小勢を、有動見候て懸り候と相見え候。あの大勢、皆川を越し候はゞ、此方の小勢を以て、利を得候事あるまじく候。此方よりも相懸りに懸り、川へ追ひはめ候へと、眞先に進み、御突懸り候。有動が先勢、早や川を渡り、陸奥守殿へ突懸り候。陸奥殿、二三百の眞先に進み、一文字に突懸り、有動が先勢を突立て、有動一類餘多御討取り候。有動も數箇所手を負ひ、少し引色に見え候へば、川中に渡り懸け候後勢氣を失ひ川中より取つて歸し、散々に落行き候故、先手も破軍致し、右往左往になり候所を、追討に數百人御討取り候。有動は夫より山鹿の居城に、二萬計りにて楯籠り候。隈部は降人に罷成り候由、申候事。

一、有動退治の爲め、山鹿へ出張候て、城の體を御覽候所に、切所を構へ二萬餘楯籠り候故、急々御攻め候事もなり難き故、城の大手前左右に、附城を二つなされ、くらひ攻になさるべしとて、附城の普請之ある所、國中の國侍共、一揆を起し、陸奥守殿居城熊本の城を、幾重ともなく取卷き、晝夜攻め申す由、熊本より山鹿へ註進之あるに付、附城二箇所を、唯堀一重のかさあげになされ、二の附城に、雜兵四五百人御入置き候て、陸奥殿は、熊本へ御歸り候。扨、山鹿より熊本への本道は六里、山坂多き堀道にて、數箇所の切所之あるに付、合志道へ廻り候へば、七八里も之あり候へども、此道筋は、定めて一揆油斷仕るべしとて、合志郡へ廻り御通り候。本道筋は、佐々與左衞門、陸奥守殿旗本の體に見せ候て、通り申候事。

一、陸奥守殿合志道を御通り候て、熊本の總構坪井口へ御押寄せ候へば、笠城・宅磨・阿蘇家の者共、此口を堅め之あり候。其頃、坪井口は、北より南へ小川流れ、東西に白川の大川流れ、川より内に、茶臼山とて小き丸山あり。小川を前にあて柵を振り、茶臼山を、かきあげの城に拵之あり候。陸奥守殿は、本道筋御通り候て、京町口へ御入りあるべしと覺悟致し、飽田・合志・山本・玉名四郡の者共、本道筋のつ

坪井口一揆

まりつまりの切所に之あり候。坪井口の者共、少し油斷致し之ある所に、陸奥守殿御押寄せ、急に御懸り候故、一揆共防ぎ兼ね候へども、前の川、小川と雖も、岸高く候故、馬を乘込め候事なり難き川故、先手少し渡り兼ね候所を、陸奥守殿、眞先に進み渡り給ふに付、何の造作もなくかけ渡り、一揆原を突崩し候へば、一揆は茶臼山へ取上り、度々相戰ひ候。此手の一揆の大將田代・田上、一家一類共に申聞け候は、今日何れも此所に於て討死を遂ぐべし。討負け在所々々へ引籠り、降參致し命助かり候とも、佐々殿、御心許しはあるまじく候。然るを、主人に賴み世を渡り候はんも、武士の本意にあらず候。萬一、勝利を得候へば、本望の至なり。何れも其覺悟仕り候へと申し候へば、何れも其意を得候と、必死を極め、度々相戰ひ候へども、終に田代・田上討負け、一人も殘らず討死致し候。田代・田上を始め、二三百人御討取り、坪井口を討破り、城を取卷き候一揆東へ通り拂ひ候へば、城中よりも切つて出で候故、陸奥守殿、城へ御入り候。然れども又取卷き候へども、陸奥守殿、城中へ御入り候以後は、攻め申す事は之なく候。夜明方に、一揆共、少し引色に見え候へ

ば、城中より討つて出で候。一揆破軍致し、方々落行き候を、追討に數百人討取り候。一揆の內に、返忠の者も之あり候由、申候事。

一、熊本近所の一揆は、大方退治し候へども、山鹿への通路はなり難く候に付、二箇所の附城、兵糧づまりになり候へども、熊本より兵糧御入れ候事ならず候故、肥前へ船手より御賴み候て遣し候。則ち肥前衆、兵糧・玉藥以下、大勢にて人夫に持たせ參り候所を、有動、城中より切つて出て、肥前衆を追拂ひ、持來る所の品々、皆一揆の城へ取込み、附城は彌々難儀に及び候に付き、重ねて又、筑後立花殿を御賴み候所、立花殿より立花三左衞門・天野源右衞門大將にて、二備に致し、兵糧・玉藥をうちかへ袋に入れ、人每に腰に附け、馬上の者は鞍の後輪につけ候て參り候。先づ一備、有動が城の大手前へ押寄せ、備を立て、馬上の者は下立ち鑓を持ち、弓・鐵炮の者も、夫夫に身構を致し、備定まり候て、簇を振り候へば、後の一備、南の方の附城の前を押通り候時、銘々、腰に附け鞍に附け候うちかへ袋を、切落し候へば、附城より出て候て、皆取込み候。扨前に備へたる後に、前の備の如く立堅め、簇を振り候へば、前

の備、北の附城の前を通り候時、うちかへ袋を切落し、又備を立て堅め、籏を振り候へば、前の備、後へ廻り備を立て、幾度も右の如く致し、繰引に仕り候。此所、廣き野原にて候。二十町餘も過ぎ候へば、大坂の切所之あり。有動、城中より見て、あの如く繰引に仕り候はゞ、何時には、彼の大坂の切所へ參るべく候。其時割を考へ、討つて出で、立花殿衆を、谷底へ追落し申すべしと、時分を見合せ候所、立花殿衆も其旨を悟り、城より見え候程は、右の如く、如何にも靜に繰引に仕り候が、少し城より見え難き所に至てつは、備を崩し一騎駈に彼の切所を乘越え、向の高みに備を立て候へば、城より討つて出で、大坂へ乘懸け見候へば、立花殿衆、はや坂を越え候。有動が先勢、後勢へ、敵はいや切所を越え候ぞと申し候へども、大勢動き立ち候故、其事をも聞き付けず、無理に坂へ乘懸り候故、先勢は後勢に押立てられ、了簡なく坂を乘下り候を向の高みより、弓・鐵炮を射懸け候へども、後へ歸るべき樣もなく、又前へは進み難き故、左右の谷へ頽れ落ち、弓・鐵炮に中る者數百人なり。然る所に、二箇所の附城よりも切つて出で、前後より取り挾み討ち候故、有動、破軍致し、散散になり候。然れども大勢故、方々より城へ立歸り、又籠城仕り候。其後、壹岐守殿御扱ひなされ、豐前小倉へ召寄せられ、有動一類、小倉に於て、御討果なされ候事。

佐々與左衛門討死

一、陸奥守殿先手佐々與左衛門事、山鹿より熊本へ、本道筋を參り候所に、數箇所の切所にて、一揆共を追拂ひ、鹿子木と申す所迄參り候。熊本より二里、山鹿よりは四里御座候。是迄は數箇所の切所を、討破り參り候へども、鹿子木には、一揆大勢にて待請け相戰ひ候。與左衛門、幾度も突崩し追拂ひ、數多討取ると雖も、一揆の大勢、荒手を入替へ〳〵相戰ふ。其上、與左衛門が勢は、山鹿より鹿子木迄四里の間、數度、荒手の大勢に懸合ひ相戰ひ候故、多くは手を負ひ、さなき者も次第々々に草臥(くたび)れ、與左衛門も終に討死致し候。組自身の者、一人も殘らず討死仕り候。賀惠と申す者、與左衛門を討ち申し候由申候。此合戰場、今に御座候事。

右の樣子は、陸奥守殿へ奉公仕り候田邊平右衛門と申す者、物語り仕り候。此平右衛門は、山鹿の附城に籠り候者にて候。又一揆の樣子は、坪井口一揆の大將仕り候

田上と申す者の躮、其頃幼少にて生殘り、町人致し罷あり候が、物語り仕り候なり。

成政、熊本に下着

一、佐々陸奥守成政公、肥後國拜領なされ、天正十五年六月下旬に、肥後飽田郡熊本へ御着き候事。

隈邊相模を討つ

一、肥後國中田畑總書付を仕り出し候へと、國侍五十人餘に仰付けられ候所に、菊地郡の主、隈府の城に居申す隈邊相模守入道、領分の書付を出し申さず、隈府の城に楯籠り候に付、八月朔日、陸奥守殿人數一萬にて、隈府へ御取懸り、隈府の城取巻き、城より後の山を御取り候時、雙方死人多く御座候由、名城故落すべき樣これなく候。

一、八月三日の曉、山鹿郡の主隈邊式部少輔大將右藤大隅守、人數三千にて、陸奥守殿方へ加勢に參り候。陸奥守殿本陣の後に、川を隔てゝ陣取り居り候。隈邊式部は、相模守子にて御座候へども、親子久しく不通にて御座候に付、親と一所にならず。陸奥守殿方を仕り居り候へども、親相模守方より、色々頼み申すに付き、裏切仕るべしと約束仕り候。

一、同四日の日、隈府の城、總攻なさるべしと、諸手へ仰觸れられ候。城御攻め候時刻、後より式部御旗本へ切懸り申す筈の由。

隈部の家老赤星等逆心

一、城中より相模守家老赤星・福の本兩人逆心仕り、式部少輔と申合され候事を、陸奥守殿へ申入れ、其上、四日に城御攻め候刻、本丸にて裏切仕るべしと約束にて、逆心仕り候。

隈部敗北

一、陸奥守殿總人數は、四日の未明に城を攻めさせ、旗本衆千計りにて、式部備へ未明に取懸り、合戰なされ候。式部少輔は、未だ油斷仕り居られ候所突懸り、即時に切崩し、勝利を得られ候。式部少輔敗軍仕り、居城山鹿の城と申す所に、楯籠り候事。

隈部切腹

一、總人數は城を攻め、合戰仕り候所に、逆心の者共、本丸より裏切仕り候故、即時に城落ち申し候。相模守切腹、其外、一家の者殘らず相果てられ候。

一、山鹿城の城へ、八月六日に御取懸り候。隈府の城と、山鹿の城との間、五里御

座候。

一、熊本より隈府へ七里、熊本より山鹿城の城へ七里半。

一、同七日、城の城原口にて、鐵炮迫合御座候。

城の城の大將

一、城の城へ籠り候總人數、男女三萬餘、内、男一萬八千人、大將式部少輔、總合戰の差引侍大將は右藤大隅守、其外、右藤一門山鹿彦次郎抔と申す者にて御座候。

一、同八日より、附城二箇所御取立て、普請之あり。

一、二つの附城の間四町程、敵城の總郭より附城の間四五町程。

佐々右馬助等討死

一、八月十三日に、城の城遠通寺口より御攻め候。陸奥守殿衆頭分佐々右馬助・赤澤右近・高井左門、其外、七十八程討死。

一、熊本陸奥守殿居城を、國侍共數萬人にて攻め申し候由、十三日の曉、留主居より註進。

一、其曉、陸奥守殿へ附き候國侍、皆々退き、上方勢計り殘り、三千程御座候由。

一、十四日の朝、附城に侍を殘し置き、四日の晩方に、熊本後巻の爲め、廻り道なされ、御引取なされ候。

一、一箇所の附城に、三田村勝左衞門・才田傳右衞門・小島少藏・右田源助・大木彌助、此等を頭にて雜兵三百餘、又一箇所の附城に、前野又五郎・杉山小助・瀧三彌・多田新兵衞、此等を頭にて雜兵三百餘、右の衆、附城に御殘し候。

一、陸奥守殿御退口、道にて支へ候へども、御方便好く、十四日の夜中に、熊本の城一里程脇の鳶の栖山に御着き、總人數兵糧遣しなされ候。

一、十五日の未明に、熊本茶臼山、唯今は本丸にて候。一揆大將本陣に仕居り候所へ、後の方へ廻り、坪井川を越し、高岸を攻上り、數度迫合御座候て、終に切崩し、追討に一揆共討たれ候。

成政熊本城に歸陣

一、城中よりも突出て追拂ひ、陸奥守殿、城中へ御入り候。然れども、一揆共多勢故、又城を取卷き申候所、度々突出て合戰之あり。其後、一揆の方より、味方に參る者多く候て、合戰勝利を得られ候。其以後、國中所々にて合戰之あり、大半御納めなされ候。

隈部等誅せらる

一、山鹿の城の附城、兵糧之なく迷惑仕るに付、立花飛驒守殿へ、兵糧御入れ候樣に頼み遣され候。

一、飛驒守殿、三千餘にて十月九日に、城の城原口へ御取懸り、鐵炮戰御座候。城中より飛驒守殿御陣の後へ、人數を廻し候に付、早々人數御引上げ、退口に兩の附城へ、袋に米・味噌・鹽・肴など入れ、總人數に腰に附けさせ、附城塀の外より、城へ投込み御退き候。

一、飛驒守殿御退き候を、城中より右藤越前と申す者大將にて、千計りにて附け候所に、こゆい村の近所、腹切坂の坂八分程へ、一揆攻懸り候所に、三千一度に御返し、坂下へ追下し、一揆數多討たれ引取り申候。

一、其後、太閤樣より西國衆仰付けられ、人數御下し、陸奥守殿は御上り、跡にて山鹿城の城も嗳になり出で候て、隈部式部・右藤一家三百計りにて、太閤樣へ御禮に上り申候とて、豊前小倉迄參り候を、森壹岐守殿などへ仰付けられ、小倉にて御討果しなされ候。其外、小城共に楯籠り候を、四國衆御攻めなされ候由申候。以上。

右の段、古き者共咄を、若き時分承り候、有增覺え候の間、不合なる事のみ、御座あるべしと存候。以上。

肥後隈本戰記　大尾

黑田長政初陣

岸和田合戰

黑田長政記

一、長政公、十三歲の御時、秀吉公、毛利家御取合候時、備中陣御初陣。其時、備中國すくも山の城、秀吉公御責りなされ候時、長政公御高名。明くる十四日の御歲、梁瀨にて、柴田と秀吉公御取合の時、柴田敗軍に及び、則ち長政公、御高名され候。

一、天正十四年、紀伊國雜賀根來衆、一揆を催し、中村式部殿居城、和泉の岸和田の城を襲ひ候に付て、御加勢の爲め、蜂須阿波守殿・長政公御兩人、岸和田へ御加はりなされ候時、紀伊國の一揆、根來衆一同仕り、大坂堺へ相働き、岸和田の城に、手當を半分殘し、堺表へ相働き候時、手當の者を、御自身御かせぎなされ、御兩人の御人數にて、御切崩し候の處に、堺表へ相働き候人數、堺を差捨てゝ、岸和田へ襲ひ來り候時、二度御迫合なされ候。悉く追崩し、長政公、御自身御太刀打ち高名なされ候。其時、當座の御褒美として、河內國諏訪池村と申す在所を、下され候。長政公・阿波

秀吉の九州下向

守殿、御兩勢計りにて、御切崩しなされ候。根來衆敗軍致し候。蜂須賀彥右衞門殿・如水は、御上使として、備前・美作御改に、御越しなされ候。夫故、御名代として、阿波守殿・長政公、岸和田へ御越し候。

一、同十五年、秀吉公、九州御下向の時、秀吉公は、肥後表へ大和大納言殿・宇喜多中納言殿・毛利輝元、其外豐前・豐後の國衆、御差添へなされ、日向表御働きなされ候。日向の高城御取卷き御攻め候時、諸手として、宮部善定坊・蜂須賀阿波守殿・尾藤甚右衞門殿・如水老、其外豐後の大友殿、豐前國諸手になされ、如水老御陣所より、一里程濱手の方に、長曾我部元親大將として、船手衆陣所へ御見廻として、阿波守殿・甚右衞門殿・如水老三人御座候時、島津端城の內、財部と申す城、是も一里程御座候。其城より每度罷出で陣貝取る。船本への通りの者を、通路切り仕候間、右の御三人衆へ、長政公御同道なされ、明日にも明後日にも、伏を置かせられ候處、各御談合なされ、財部より、罷出で候者を、御打ちなさるべき由にて、伏場を御覽なされ、御歸り候。御三人は、長曾我部殿へ御廻しあるべしとて、夫より御別れ、御歸り候と、寄

長政奮戰

合頭に寄合ひ、其儘御自身、馬を御入れなされ、敵數多の中へ、乘込ませられ、御供に參り候衆も、御同前に懸け込み、各も手を碎き、敵數多討取り申候。長政公、御切廻りなされ候刀を、御打落されなされ、脇差を以て、敵と御仕合なされ、敵を御打取りなされ候。

肥前一揆

一、島津御詫言申すに付いて、夫より秀吉公御歸陣なされ、下關に御逗留なされ候時、九州の御仕置仰付けられ、豐前の內六郡、如水老へ進ぜられ候。肥後國は、佐々陸奥守拜領、筑前國は、隆景拜領、筑後國は、立花左近殿・小早川藤四郎殿・筑紫上野殿。此衆隆景、御與力として、筑前一國拜領の上、筑後衆殘らず、御附きなされ候。然る處に、肥後一揆盡く起り申候時、陸奥守、取出山鹿の城・熊本の間、通路切り申候故 山鹿の城、兵糧詰り、迷惑に及び候段、上方より聞召さるゝに付、筑前・筑後の兵糧を、籠置き候樣にと、如水老へ仰せ下され、隆景へ御相談の爲め、小人數にて、筑後の內へ御座なされ候。

豐前一揆

隆景と御相談なされ、御逗留の內に、豐前一揆、十月朔日に、起り申候通り、長政公御居城馬岡へ、註進御座候に付、則ち其日、筑後へも仰遣

長政出陣

され、則ち御陣觸なされ、馬岡に居り申す御人數計り召連れられ、其夜の亥の刻、馬岡御立なされ、六里ほど御越し候て、夜明けに、朝日峠と申す所に、御人數立てられ、其邊の國侍の證人共、御取りなされ、諸方城々へ御働きなされ候。

日隈高田兩城陷落

一揆共、日隈と申す所、早や取出に拵へ籠め申候。五町程向ふに、高田と申す城も、早や拵へ、一揆共籠申候。然る時先づ日隈を、一時攻めに、御攻落あるべしと、寄場を御見及に御出て候。其時、先手衆少々城の表より、城戸口へ差詰め迫合ひ候。其時、一揆二千計りにて、日隈へ後巻仕り候て、懸り申候時、旗本の御人數千計りにて、押出しなされ候。其時、御一戰遊され、大將如法寺孫二郎御討取りなされ候。其時、日隈高田御詫言致し、人質を差上げ、落城仕候。其日、廣津へ御討入なされ候て、方々へ御働きなされ候內に、筑後へ豐前の一揆蜂起の由、御註進候故、肥後表の儀は、隆景へ仰置かれ、筑後・筑前兩國にて、山鹿へ兵糧御入れなされ候へと仰せられ、如水老と馬岡へ御歸府候。

長政馬岡へ歸陣

先づ如水老へ御對面、萬事御相談なされ、一々仰付けらるべき爲め、長政公も馬岡へ御歸りなされ候。然る所に、城井中務き井谷に差籠り申すの

由、到來に付いて、翌日又城井へ御働なされ、一城井居城さた田之上迄、御働きなされ、一揆共少々御討ちなされ候。彼所は切所にて御陣所之なく候間、筑前と申す所廣みへ御引取なされ、又城井へ御押籠め、御打果しなさるとの儀にて、彼谷御引取る刻、方々の谷より、一揆共差合ひ候時、合戰懸り申候所に、先手衆無案内故、少し後れを取り、道半里程引取り申候内、彼衆少々討たれ申候を、長政公御覽なされ、御自身御返合なされ候時、敵も退き申候。付いて廣□にて、御合戰なさるべしとの儀にて、御引取り候時、又敵返り申候間、御自身、又御懸なされ候へば、今度は深田御馬を乘込みなされ、御馬進み申候時、御馬より御下り、御自身鑓御構へなされ候へば、敵も打ち申さず候。馬岡迄御引きなされ候。又四五日過ぎ候て、城井へ御働きなされ候。其内に、城井要害を拵へ候故、卽時に御押籠めなさるゝ事、なり難きに付いて、城井居城御□囘の上に、第切山の內、銀樂と申す古城御座候を、取出に御取りなされ、相山丹波黒田右兵衞・原彌左衞門、都合御人數二百計り御差籠なされ、馬岡御引取なされ候。其夜城井より罷出て、銀樂城を攻め申候處、召し置かれ候三

犬丸城沒落

秀吉長政の武功を賞す

豐前一揆鎭定

人、身命を捨てゝ、相働き候故、城井勝利を失ひ、居城引取り申候。其内に宇佐郡、上も下も、三郡の者共、盡く一揆蜂起仕り、犬丸・加來・福島、此城へ取籠罷居り候を、其聞え御座候に付いて、又東目へ廣津迄、御馬を寄せられ候。日鬼木掃部・伊藤・田中・尾緒方々の者共、廣津へ働き申すべしと、相集め候時、御馬を出され、彼者共御切崩し、悉く御討取りなされ候。其後、犬丸を御取卷きなされ、竹束井樓にて御攻込め候て、千五百餘人御討取りなされ、則ち其首をも大坂へ持たせ遣され候。御使は、小林新兵衞と申す者、持參なされ候。秀吉公御感なされ、御褒美として、御馬を新兵衞に遣され、御腰物下され候。其刻、城井事・隆景・毛利壹岐守・安國寺扱を以て、御詫言申し、御旗本に罷りなり候。

一、犬丸落城の後、加來・福島御攻なされ、要害能く力攻に罷成らざりしより、井樓などにて御攻め候故、次第に城弱り、大將共を打ち候て出し、殘る者共、御詫言申上ぐるに付きて、雑兵者御助けなされ候。豐前の一揆、十月朔日より起り、極月迄九十日の間に、長政公御覺悟にて、悉く靜謐仕り候。

長政肥後表出陣

一、其後、肥後國御攻に、上方より御人數御下しなされ、靜謐仕候時、如水老も御上使として、肥後表へ御出陣なされ候。城井子彌三郎を、如水老召連れられ、肥後表へ御座なされ候。御留守に城井鎭房御禮に罷出て候を、御成敗なさるべく候間、其註進次第に、肥後にて彌三郎も御打果しなされ候へと、如水老と御相談なされ、差置かれ、鎭房御禮に罷出て候時、御酒など遣され、野村太郎兵衞に御肴遣され候へと、御目加へなされ候を、太郎兵衞見申し、城井居申す後より、刀を拔き、城井が額を、切り申し候處に、盃を座敷へ捨て罷立つべしと仕候を、長政公御自身、御切殺しなされ候。幷に其日、城井召連れ參り候侍共、百四五十人之あるを、殘らず御成敗なされ、居城へ御取退きなされ、鎭房が親長甫、再び妻子さわ田にて、御取なされ、則ち中津へ御歸陣なされ候。

長政渡鮮

一、朝鮮國御陣の刻、對馬豐崎より御渡海なされ候。小西攝津守は、一日先に渡海仕り、釜山海の城を攻落し申候由、船中にて、長政公聞召し付けられ候はゞ、小西、跡を都へ御押しなさるゝ事も、如何に候間、きんむい口へ御渡しなさるべしとの儀にて、彼城の船本へ、御船を着けられ、御上りなされ候所に、朝鮮人人數出し、則ち御合戰候て、朝鮮人少々御討取なされ候。敵、きんむいへ引籠り申候。其夜、無理に御攻籠め、きんむいの城御攻落し、敵數百人御打取なされ候。夫より都へ御打入り候。攝津守、□よりは、二日程跡より都へ御入り候。其後、追々加藤主計殿、何れも日本よりの御人數、都へ集り、御奉公衆も御附き候て、朝鮮國の御仕置仰付けられ、國わけをなされ候。長政公、御請取の國は、はん海道にて御座候に付、先年の御人數、先づはん海道の際迄、參り候へと、仰付けられ遣され候。其日、日本より上使として、如水老、朝鮮都を御攻めなされ候。御對面の爲めに、御備なされ候内奧朝鮮人共、數萬人集り、先手衆を取巻き申候由、御註進候故、如水老に御對面なされ候て、早々夜通しに、御駈付け、卽時に數萬の者を、御切崩しなされ、數千の人御切捨てなされ候。

きんむい落城

一、小西攝津守、平安道の御仕置請取申すに付いて、彼地へ罷越し候處に、平安城に、朝鮮の王楯籠り申候由、註進候故、長政公、小西一所に、平安道へ御押しなされ

長政武者振

平安城陥る

候。平安道迄一里程御越しなされ候刻、長政公は、上の瀨迄御渡し候て、平安城へ御押しなさるべしと、御相談候所に、此方の御先手衆は、道に蹈み迷ひ、小西人數同前に、平安城川向ふ迄、御押し候。御旗本大友義統、上之瀨へ御廻しなされ、長政公は小西御見廻がてら、先手の者小西手と同前に、參り候に付いて、小西所へ御見舞なされ、日暮れ申すに付いて、此方先手の者、同前に攝津守陣所に、御一宿なされ候所に、其曉より船を渡し、小西陣所先手の者の襲ひ申すに付いて、長政公、先手の御人數召連れられ、則ち御駈付け候て、敵を川へ追籠めなされ候。又敵、返し、度々御馬を御乘込みなされ、敵餘多御切り候處に、長政公、右の御腕を、矢を以て、射申候處を、其者を御目に懸けられ、深き所迄、乘込みなされ、彼者を二刀御切りなされ候處に、彼の敵切られながら、御具足の草摺に取付き、川中へ引落し申候處を、渡邊平吉と申す者、其儘駈付け、長政公を引上げ申候。則ち其夜、朝鮮の王は、城を明け退き、翌日平安へ、攝津守同前に御入り候。五三日御休息なされ、夫より御請取り黄海道へ御座なされ、御請取の郡の御仕置き遊され、盡く差出しまで御取りなされ、御逗留の内に、如水老、又日本へ御歸朝候へと、名護屋より仰付けられ候故、近日御歸朝なされ候由、御註進候て、御對面の爲め、都へ御越しなさるべしと、御用意の刻、はん海道の府中に御座候。又朝鮮人數千人差起し、長政公御居城へ、働き仕るべき支度仕り、一所に寄合ひ候處を、御聞付なされ、卽時に駈付け候て、數千人御打捨てなされ候。夫より都へ御越なされ、如水老御暇乞遊ばされ、はん海道へ御戻なされ、彌〻彼國の御仕置等、仰付けられ、御逗留候處に、朝鮮人方々山より罷出て、通路切仕り候に付いて、又國中御働なされ候。はんせんと申す城、隆景御請取の古部がせんほうと申す所、程近に御座候故、はんせんと申す所へ御座所を、御替へなされ、暫く彼所に御逗留の内に、大明人差起り、小西攝津守居城平安へ押込み、合戰仕り候處に、小西打負け、敗軍になる。此方御つたへ城りうせんと申す城に、小河傳右衞門召置かれ候處に、小西より先に、大友義統罷越され、小西事大明人より切崩され相果てられ候間、此城抱へ候事、なるまじく候間、罷退き候へと、仰せられ候へども、長政公註進仕り、返事之なき內は、縱令相果て候とも、城明け申す事、罷成ら

ず候間、先づ義統は、先へ御退き候へと、傳右衞門申候に付、隆景御請取のへぐさんと、申す城へ、義統は御退きなされ候。

一、其後、小西攝津守は、平安を追落され、りうせん迄罷退き候内、隆景より古都迄、御引取り候へと、攝津守所へ仰せ越され候に付いて、へぐさん迄御引取り候て、彼地一兩日逗留候内に、傳右衞門も、はいせんよりの御註進により、此方のつたへ川村と申す所に、栗山備後罷居り候所迄、傳右衞門引取り申候。然る内に、攝津守は、平安を追落され候間、定めて長政公御居城はいせんも、御退き候はんと存じ、曉、數千人を以て、はいせんの城へ、押懸け申候。其儘御人數を御出し、御切崩しなされ候。左樣の樣子、都御奉行衆へも御註進なされ、隆景へも仰せ進ぜられ、御奉行衆御差圖迄は、爰計り罷退き申す儀なるまじく候由、都へ仰せ進ぜられ候。然る時、都にて備前中納言殿へ、御奉行衆御相談の上を以て、大谷刑部少輔殿、隆景御居城がせんはう迄、都より御出で候て、先づせんほうを御引取なされ候へとの由、度々長政公へ仰せ越さるゝに付いて、はん海道を御引拂ひなされ、せんほう迄御引取りなされ候。其以後、又御奉行衆御差圖にて、都迄隆景・長政公、御兩所御引取り候へと、仰せ越さるゝに付いて、何れも國々御仕置なされ候衆、悉く都へ御集めなされ、日本へ御註進候て、名護屋よりの御諚次第になさるべき由、仰せ談られ、暫く都へ、御逗留なされ候内に、備前中納言殿・增田右衞門尉殿・大谷刑部少輔殿・石田治部少輔殿・淺野但馬守殿・加藤遠江守殿、此六頭衆・其外九州衆、都へ御集り候て、御座候内に、敵又都へ一里餘程、川端へ罷上り、かき上げを仕り、籠り居り候を、御攻取りなさるべしとて、右六頭衆御出てなされ、御攻めなされ候へども、存の外敵小勢には候へつれども、堅く城を守り、御攻損なされ、手負數千人之あるに付いて、都へ御引取なされ候。其翌日、長政公御一手にて、彼の取手へ御働き候て、御押充てなさるべしとの御内存にて、御働き候へば、長政公御手並、敵共能く存じ候て、御旗先を見、悉く船に乘り、明けに乘退き申候。其後、都の内南大門道筋の角は、隆景御一手の衆、東大門方角は、長政公御一手の衆、御先二之目御奉行衆、斯樣に方角御定め候て、御置き候に付いて、南大門筋大明人數千人、罷越し候由に付いて、隆景御一手の立花左

近殿、物見に罷出てなされ候へば、敵に御行當りなされ、御迫合ひ、立花殿衆、少々手負ひ御座候由。長政公、戸川肥後守殿へ御振舞に御座候處、立花殿、敵に御行當り、御難儀の由、註進候の故、御人數に御構なく、御一人御見舞に、御馳付けなされ候。其由、御陣所へ申し來り、母衣衆・御小姓衆・騎馬三十程、追々御跡より、馳付け申候。左樣に候處に、立花殿、先の物見の者共、大明人へ行當り、漸く凌ぎ退き申候處を、長政公、立花殿侍衆御集め候て、能き所に御差圖にて、御人數を立てらるゝ故、敵もつけやの同勢一所に罷成り、戰陣仕り、罷居り候。其時、都の御人數、悉く御差出しなされ、御一戰なさるべしとの御談合に相究め、此方御人數も、立花殿御跡へ、御押付け候處、備前中納言殿、御自身御座なされ候て、長政公は、東大門の先手に候間、先へ御座候儀、御無用に候。二の目は、中納言殿成さるゝ分に、兼々相極め置かれ候間、有無に二の目は、中納言殿先手衆へ、罷越し候。隆景の御內粟屋四郎兵衞組、先手にて御座候處に、大明人總懸りに、〔脱アルカ〕粟屋四郎兵衞組、即時に、追立て候處に、立花殿御助合ひ候て、御切崩し候。其日は暮れに及び、二の目の御合戰も御座なく、總人數都へ御打入れなされ候。其後暫く、都に御逗留候て、御合戰の催し御座候處に、遊擊は、小西陣所へ馳込み、御無事に仕るべき由、頻りに申し候に付いて、名護屋へ御註進候て、其返事により、都へ御引取りなされ、則ち長政公、殿に御定め候故、大川に船橋御渡し、都の御人數殘らず、御渡し候て、其後、船橋の綱を切り、長政公御引取りなされ候。夫よりへぐさん・きんむい・釜山海、總人數御集めなされ、御陣取り候處に、名護屋より仰せ出され候は、縱ひ大將より無事迄仕り候とも、赤國の內ちんしゆと申す城に、もくそ判官と申す者、楯籠り候を、細川越中守殿・長谷川藤五郎殿・木村常陸守殿、御大將にて、其外五萬石・七萬石の衆木そ城へ御取懸り候を、敵強く候て、此方の御人數打負け、ちやわんと申す所に引取り、在陣仕り候に付いて、縱ひ如何樣の儀候とも、日本の御人數のひけに、なり申候間、彼のちんしゆ攻殺し候へ。其上を以て、御無事になさるべき由、仰せ出され候に付いて、日本の御人數、悉くもく曾城へ、御働きなされ、ちんしゆ御取卷き候て、責口之あり御座候に付いて、加藤肥後守殿・長政公御兩殿候て出し、矢倉の角へ、御仕寄

ちんしゆ城陷落

なされ候へと、御定めなされ候に付いて、井樓など御付け候て、石垣の際迄、御仕寄なされ、日々御攻めなされ候處に、敵城堅く相支へ、埋草など石垣の際へ、附け候へば、城より投げ、續松にて、悉く、燒拂ひ申候に付いて、諸手共に御攻め咂みなされ候處に出し、矢倉の石垣の角石耳候て、相見え候に付て、後藤又兵衞與力楢原牛之助・二宮右馬助、今一人以上三人と、挺子持ち、加藤肥後守殿より、楯持二人、御出しなされ、此方の挺子持ち石垣繕ぎ候間、人差籠め候て、角石を刎出し候故、石垣、其儘崩れ申候處、野村太郎兵衞・後藤牛內・堀平左衞門・輕屋與左衞門・上原與平次・竹井二郎兵衞、肥後殿より森本義太夫など、此方の者共同前に、石垣に一番に上り申候。夫れより追續き、長政公御乘りなされ候に付いて、何れも御傍に罷在り候者共、御供仕り、乘入れ申候。其後諸手より、乘り申すに付きて、ちんしゆの城落ち申候。夫より奧二日路・三日路程、日本の御人數御働き候て、釜山海へ御引取りなされ候。何れも海端に付、城々仰付けられ、御在番候。其後、大明より小西攝津守を以て、御無事、仕官人差渡し申すべき由、申すに付いて、中一年之あり候て、加藤肥後守殿・長

秀吉渡鮮

政公、日本へ御呼びなされ、伏見にて御屋鋪を、御兩所へ進められ候事、折節又、大明國の御無事破れ、左右に御座候に付いて、長政公・加藤肥後守殿御兩人、御渡しなされ、前々の如く、海端に城御取り候て、御在番候。秀吉公御渡海なされ、朝鮮を御打果し、唐迄御打入なさるべく候由、仰出され候處、加藤肥後守殿、せつかいと申す所に、御在番、長政公は、屋ぐ山と申す所に、御在番なされ候。然る處に、肥後守殿御在城せつかいの先、蔚山と申す所に、御勤請仰付けられ、肥後殿、夫へ御移り候はゞ、其跡せつかいへ大明人百萬ほどにて、蔚山へ取懸り申すに付いて、肥後殿自身、せつかいより、御駈付けて、蔚山へ御入り候。其の時蔚山御勤請の衆は、淺野紀伊守殿、中國衆御勤請仰付けられ、公儀より御目付には、太田飛驒守殿參られ候。其時、淺野紀伊守殿、御手柄なされ、肥後守殿御入りの時、大明人と手ひどき攻合ひ御座候へども、打破れ候て、蔚山籠城候。大明人大軍にて、悉く日々攻め申候に付いて、四國衆幷に筑前中納言殿衆・豐後衆など、追々肥後殿居城せつかいへ御寄せ候て、後巻の御相談候へども、敵大軍、即時合戰もなり難く、御談合御座なされ候處

蔚山合戰

へ、長政公、御居城を如水老へ御渡し置き、手廻の御人數・鐵炮三百挺程、召連れられ、井上周防一人召連れられ、總人數は、屋ぐ山に殘し置かれ、其儘せつかいへ御駈付けなされ候て、各へ後巻の御談合なされ、早速蔚山表へ後巻に御出でなされ、敵居申し候處、川一つ隔てゝ、御對陣なされ、其儘各示し合はされ、一番に御自身御懸入りなされ、御働きなされ候所へ、諸手衆追々駈付け候て、敵敗北仕り候。先づ肥後殿蔚山御運開かれ、蔚山に、其儘御在番なされ候。其後せつかいへ長政公御移りなされ、御在番の所に、數度せつかいにて、高麗人と御迫合ひなされ候。

秀吉薨去

其後、太閤御他界なされ、大明人方より起り、左右に御聞き申し候に付いて、内府樣御見せに、宮木丹波守殿、御使に遣され候處に、各仰せられ候は、小西、拵を仕るべしと申候へども、大明人、攝津守城・島津在番の城、攻め候て、敵勝利を失ひ候へども、又無事を仕るべしと、計略仕り候を、攝津守、ぶら〳〵と扱に、立舞ひ居り申候由。長政公・肥後守殿、鍋島加賀守の御相談にて、内府樣へ仰上げられ候は、小西、ならざる噯を仕るべしと申し、ぶらつき居り申候。畢竟は大明人より、大勢を催し、日本人を打果すべきの樣子と相見え候を、小西うつけ候て、居申候通りに、仰上げられ候へば、太閤は、御他界に付いて、又日本の大軍御催しなされ候へども、太閤御存生の如く、人數も通り申さず、内に悉く日本人打果され候へば、結局日本の御負に候間、各仰談ぜられ、御在番の城を、燒き崩し、御引取り候へと、仰せ下され候。其時、攝津守、島津などは、無事を仕るべしと、申候處に、數度唐人武略を仕り候を、攝津守、伏見御奉行衆に申合ひ候由、各へも申さるゝに付いて、攝津守などは、如何樣の無事など仕られ候へ。長政公・鍋島加賀守殿・毛利壹岐守殿、其外中國衆など、仰せ談ぜられ、内府樣より御意に候間、兎角此衆は、御引取りなされ候とて、蔚山・せつかひ・釜山海・竹島、悉く御敗れ候て、御渡海なされ候へば、小西・島津、此御兩人も、其儘翌日、御引取なされ候。

長政上洛

一、朝鮮御引取りなされ候て、長政公、上方へ御上りなされ、秀頼公・内府樣へ、御禮仰上げらるべき由に候て、御上洛候。然る處に、各〻御奉行衆より、内府樣へ、太閤御遺言に仰置かれ候儀、内府樣御背きなされ、御心儘になされ候由候間、各より一つ

事を以て、仰せ入れられ、內府樣と各御奉行衆と、違却に罷成り、內府樣御屋敷へ取懸り、內府樣と各打果て候はんとの御內談の由、雜說御座候に付いて、內府樣御屋鋪へ、長政公、侍共二十人程召連れられ、御籠りなされ候所に、內府樣、殊の外御感なされ、今迄、斯樣の御心付候衆、之なきに、一入御滿足なされ候由、御意なされ、長政公御手をなされ、御戴き候。其外、福島殿・加藤肥後守殿などを、如水老・長政公御才覺を以て、內府樣方へ御引籠なされ候。大坂の御城には、秀頼公御後見として、加賀利家、其外御奉行衆、一所に御出てられ候て、內府樣と御間、滯り申すに付いて、如水老御才覺を以て、細川越中守殿・加賀大納言殿、御緣者に付いて、內府樣御間御直しなさるべく候由、越中殿と御相談なされ、其上を以て、內府樣と御入魂になり申候。其故、伏見より大坂へ、大納言殿御煩し、御見廻として、內府樣御下しなされ候。其時、萬事長政公、御才覺を以て、世上能く罷成り、內府樣御滿足なされ候。藤堂和泉守殿、其時、內府樣御宿にて候に付いて、御奉行衆屋鋪と、程近く候故、御用心の爲め、其夜も長政公、又內府樣の御宿に、御籠りなされ候。翌日、內府樣、伏見御歸りなされ候時、御暇乞の刻、萬事此中の儀、長政公御一覺悟にて、靜謐仕り候由、御謎文なされ、長政公の御手を、御戴きなされ候。

石田三成
伏見籠城

一、其明年、加賀大納言殿、御遠行なされ、肥前守殿は、大納言殿御弔の爲め、御國の御仕置旁北國へ御下向なされ、御在國の內に、又肥前守殿と內府樣、御間滯り候へども、互に仰せ分けられ、埒明き候て、御無事に罷りなり候。其翌年、會津の景勝治部少輔、申し合せ、內府樣へ敵に罷成られ候。其後、治部少輔各七人、內府樣へ申上げられ、石田治部少輔を、御打果さんとの御內談候故、治部少輔、大坂を夜拔に仕り、伏見へ罷上り、伏見の西の丸に楯籠り居り申し候。其時の七人衆は、越前中納言殿・福島左衞門殿・淺野紀伊守殿・細川越中守殿・藤堂和泉守殿・長政公・加藤肥後守殿にて、御座候。伏見の西の丸御攻めなさるべしとの、御催に候ひつれども、生駒讚岐頭殿・山內對馬守殿、太閤よりの御宿老にて御座候故、內府樣へ、七人衆へ右の御宿老衆連れて、仰上げられ、御無事に罷成り、治部少輔事、悴隼人に知行讓り、佐和山へ隱居仕り、伏見を退き申候。

長政關東下向

石田三成謀叛

一、其明年、景勝御打果てなさるべしと、御意なされ、内府様、關東へ御下向なされ候に付いて、長政公も追付き、御跡より關東へ、御下りなされ候。其御跡にて、治部少輔、敵に罷成り、五畿内・中國、其外兩國衆を催し、伏見の御城に、内府様、御人數御殘し置きなされ候を、悉く攻殺し申候。其後、北國表へも治部少輔差圖にて御人數差下し、尾張表へ手當など仕り候故、美濃・尾張・五畿内、敵に罷成り、其内、少々内府様御供に、江戸迄御出し、衆々跡、色々治部少輔計策仕り候由、關東へ其聞え御座候。内府様は、先づ景勝居城會津の際迄、御働きなされ候はんとの儀に付いて、下野の内小山迄、御馬を寄せられ、台德院様は、宇都宮迄御馬を寄せられ候。宇都宮は、會津の出口にて候故、彼所迄、大夫に仰付けられ、蒲生飛驒守殿、手當に御殘し置きなされ、夫より上方へ、御人數を向けられ、御一戰なさるべく候間、先づ上方衆は、國々方へ御歸り候へと、仰出され候に付、福島左衞門大夫殿、長政公御同道なされ、内府様御座候處、小山迄御戻りなされ、則ち御目見えなされ候へば、御合戰又は方々、御才覺の御談合なさせられ、福島殿は、尾張國手先にて候故、早々御上りなされ、濃州の城堅固に、御蹈まへなされ候様にと、御意なされ、御目安進められ候。長政公も、大夫殿御一所に、御上り候て、清州に御待ちなさるべしと、仰上げられ、御同道候て、御上りなされ候。然る所に、内府様、御家老中御談合は、福島殿は、太閤近き御親類間にて候故、自然御心替なども、之あるべくや。左様にて長政公は、大夫殿親子程の御知音に候間、大夫殿、御別心にて候はゞ、先づ長政公を御談合なされ、御用候由にて、路次より御呼び戻しなさるべしと、大夫殿御心替り候はゞ、定めて長政公清州迄、御同道あるべく候。御別心なく候はゞ、長政公を御下しなさるべく候。其上、彼是れ御内談なされ、御舟合候て、御上せ候へと、御家老中仰せらるゝに付、俄に次馬にて、奥平藤兵衞と申す仁を遣され、武藏の厚木と申す所にて、追付き申され候。夫より長政公、又小山迄御下り候て、彼是れ夜もすがら、御相談なされ、御馬など御拜領にて、御上りなされ候。夫より清州にて、日々御相談なされ、其後、本田中務殿・石川長門守殿、内府様より御上せなされ、美濃表の御才覺牛に御座候。然る時、兎角何卒手切の御働、之なく候はゞ、内府様御馬御出でなされ候事も、

延引之あるべく候。左候はゞ、先づ手切に、岐阜御攻落し、然るべき由、御談合相極め、御人數二手に御分けなされ、一手は池田三左衛門殿・淺野紀伊守殿・有馬玄蕃頭殿・一柳監物殿、上の瀬へ御廻りなされ候は、福島太夫殿、御一手に藤堂和泉守殿・長政公・細川越中守殿・田中筑後守殿・堀尾出雲守殿、此衆は下の萩原へ、船渡しなされ、竹が鼻の城に、治部少輔人數差籠め居り申し候由、御意候、是へ御攻寄せ候て、然るべきの由にて、其日、悉く御領分の川船御寄せ候て、次第に向へ御渡しなされ、竹が

竹が鼻城

鼻の城、治部少輔は、小勢居り申す故、城よりも罷出でられず候に付いて、何の手間も入らず、悉く川を御渡しなされ、竹が鼻の前、御陣取なさるゝ時、岐阜より上の瀬心もとながり、渡瀬の向ふにしんかのと申す所へ、岐阜衆罷出で、居申す所、一柳監物殿、一番に川を渡合せ懸られ、三左衛門殿御一手の衆、追々川を渡し申すに付いて、岐阜衆打負け、岐阜へ取籠申候。其通り福島殿、御註進候故、其儘、聞懸けになされ、御陣替候。

竹が鼻城陥落

然る所に、竹が鼻も、其夜中に明退き、岐阜へつぼみ申し、夫より長政公御陣替なされ、岐阜へ御押しなされ候へども、夜中の事に候へば、彼の方角無案内故、夜明に、岐阜の際迄、御押付け候て、御座候處に、先へ御詰の衆、岐阜の城へ御懸けなされ、二の丸にて御迫合なされ候。左様に候へば、何國にても長政公は、大夫殿御一手の筈に候故、御跡へ御詰めなさるべしと、岐阜の町迄御詰め候へば、先衆の木小荷駄にて、町御押抜き候て、御通り候事、罷成らず。左様に候はゞ、御迫り候てなりとも、太夫殿、御跡へ御詰なさるべしと、追々見せに、遣され候へば、早や本丸の城へ一重に各御迫の由。左様に候時は、御座なされ候間には、落城仕るべく候。左様之あり候所へ、御押付けなされ候ても、詮なく候間、定めて岐阜の後詰に、大梯より人數差出し、申さるべく候間、彼者と有無の御一戰なさるべく候の由候間、合度の川端へ御押しなされ候處　案の如く、大垣より後詰の人數差出し申し、川の向ふに對陣を取り、敵居申候。左候はゞ有無の御合戰なさるべしと、御意なされ、田中筑後殿へも、人を遣され候へば、岐阜の手に、御逢ひなされ候故、是も長政公、御跡へ御押し候。此方より川御渡し候御人數は、藤堂和泉守殿御人數、二千餘程御座候。田中堀尾殿は、御跡詰めなされ候へ。御合戰なさるべしと、仰せ

遣され候。然る所に、田中殿は、跡の案内者故、合渡の上の瀬へ、御廻り候て、邊の在所の者に、金子遣され、二十人計り瀬蹈み仰付けられ候處に、存の外川も淺く候間、田中殿、其瀬を渡り申す樣子に候處、長政公、上に瀬御座候由、聞召され、御自身瀬の所を、御覽なされ御座候處、早や田中殿、先手の者、川の端へ望み申すに付いて、田中殿に先を越され候ては、いかゞと思召され候や。御自身、田中殿先手の者に、御加りなされ、川御渡りなされ候。船渡の口に、此方人數を立て居り申す所へ、御使下され、夫より備を崩し、一騎懸に御跡へ懸付け申し候。合渡の町口迄、田中殿人數より先に、御駈出しなされ、敵の中へ一番に御懸入りなされ、御自身御馬上にて、御切廻り、御内の者共も、追續き懸り申候故、敵敗軍仕り、はろくの川端を追打になされ、其夜、はろくの川端に、御陣据ゑられ、翌日赤坂表へ御押出しなされ、虚空藏山に御陣取りなされ、二十日程も彼地御逗留なされ候。然る所に、追々江戸よりの御人數、赤坂へ差申し、御在陣の內、方々才覺なされ、內府樣へ御味方になり申す故、仰談ぜられ置きなされ、金吾中納言殿、美濃の內松尾と申す古城、御取上げ中納言殿御家賴平岡・石見、長政公御緣者に付いて、石見所迄仰遣され候。色々御才覺を以て、中納言殿、內府樣へ御味方なさるべき通り、仰せ談ぜられ、內證にて、人質迄御取置きなされ候。

伊吹合戦

石田三成敗北

九月十四日、內府樣、赤坂迄御着陣なされ候處に、中國衆は、南宮山へ打上り、長政公へ人を越され、御忠節仕るべく候由、申され候故、毛利甲斐守殿・吉川藏人・福原式部以下の證人、御取りなされ、翌日十五日、關東表の敵と、御一戰なさるべき由にて、早朝より御打出しなされ候。然る所に、其夜の夜通しに、治部少輔・小西攝津守・備前中納言殿・島津、大垣に城番殘し置き、關ヶ原表へ打出し申され候。治部少輔、島津と伊吹の麓に、人數を立て居り申され候。其所へ長政公、御一分にて御懸りなされ、御自身御手を碎かれ、御鑓相申候て、御迫合に御勝ちなされ、治部少輔、一戰に勝利を失ひ、伊吹山へ引籠り申候。伊吹半分迄、御上りなされ候へども、敵も支へ候て、合戰仕るべき樣も、之なき體を御覽なされ、夫より御出陣御座なされ、右の御合戰の次第、仰上げられ候へば、內府樣に、今始めず御忠節御手柄共、淺から

ざる由、御意なされ、諸人見申す所にて、長政公御手を御取り、御戴きなされ候。

以上。

黒田長政記 大尾

島津貴久御軍記

島津虎壽丸貴久日向・大隅・薩摩三州の權を執り給ふ事

前大守修理大夫勝久は、當家十一代忠昌の三男なり。嫡子忠治・次男忠隆は、嫡家を續ぐと雖も、何れも早世なり。大永六年丙戌初秋の頃、勝久、同名實久と不快の事あり。然る所に、勝久より、本田次郎左衛門を使者として、同名相模守忠良に、仰出さるゝ様は、今より以後、別して御奉公申さるべし。其記(しるし)とて、伊集院の內、南郷を宛て行はれ、御判形を出さる。即ち南郷の城守桑波田孫六、此由承り、同十月廿九日、忠良の御旗下に參る。其刻、勝久、伊集院に御發足ありて、政雅入道を御使にて、南郷に日置を相添へ、忠良に遣され、益、御賴の由、深重なる間、霜月五日に、日置を知行す。翌日、忠良、伊集院に參上あり。同七日、勝久、鹿兒島へ御歸宅あり。忠良

忠良鹿兒島に行く

忠良、邊河の兩城を攻落す

も御供に參り給ふ。勝久の御劒は、忠良の內阿多加賀守之を持ち、忠良の御太刀は、御內の本田紀伊守之を持つ。互に向後御契約の儀なり。同十二日、村田越前守・土持伊豆守・梶原備前守を使にて、相模守忠良の嫡子虎壽丸、生年十三になり給ふを、勝久御養子になし、守護職を、虎壽殿に讓らるべしと仰出さる。忠良、再三辭退に及ぶと雖も、君命背き難き故に、小春十八日、虎壽丸、鹿兒島に入り給ふ。同廿七日、勝久、御住所を渡さる。其頃、隅州帖佐の鄕の城主邊河筑前守は、守護代の人なるが、如何なる恨にか、本城・新城を登構へ、實久に一味し、謀叛を起す由聞えあり。相模守、之を討たん爲め、霜月四日、同國吉田迄發向して、同七日卯刻に、兩城を攻落す。和泉よりの大將島津善左衞門は、總禪寺口より高尾迄、七八度防ぎ戰つて、終に岩本壽才に討たれ、同名又七郎を始めとして、數輩討死す。新城は、其日の酉の刻程に落去す。然れば周章てゝ、落行く者共、先は支へたるぞといふも〔脱アラン〕い〔れカ〕らず、我れ先にと人馬いや重つて、二丈餘なる、さしも深き堀間も、平地の如く、或は蹈殺され、或は〔本ノマヽ〕等具足にぬかり、或は己が灶したる續松、衣類に燼付きて、泣き叫ぶ有樣、火盆地獄叫喚等の苦も、斯くやあらんと、誠に自滅の至なり。是逆臣を理め給ふ天罰疑なし。見る人舌を翻す。然れば、帖佐の事、政雅望み申すに依つて、地頭に定められ、忠良には、伊集院を御給ひ、霜月十二日知行す。大永七年丁亥二月十八日、伊集院谷山に、伊作衆を移し給ふ。

勝久遁世

忠良剃髮

同三月中旬、勝久樣、福昌寺太鷹東堂を以て、虎壽丸に御世達ありて、御隱居の由仰出さる。忠良御返事に、御隱居所は、市來・伊集院・加治木・帖佐何方にても、御好に任すべきの由を申さるゝと雖も、此間の御領地は御望なし。然らずば、御物詣の由堅く承る間、伊作は、代々の地なりと雖も、力及ばず、勝久に進ぜられ、四月十五日、鹿兒島田の浦より御出あり。船にて谷山に着き給ふ。忠良も是迄御供なり。次の日、伊作へ山を越し給ふ。其後、御遁世あり。忠良も鹿兒島に於て剃髮し給ふ。去る程に、其梅月の頃より、政雅竝に伊地知周防介父子、謀叛の企ありと披露す。忠良入道は、此儘、山林に居るべき心中なりしかども、武勇の道逃れ難くて、五月六日、加治木に進發し給ひ、同七日、彼の三人を誅せらる。勝久、此人々の逆心にこそ恐れ給はめ。今は何の御怖畏かあら

勝久の變心

ん。加治木・帖佐兩所を、御隱居所になし奉らんとて、同十一日、伊作へ參らん爲め、加治木より出船して、鹿兒島戸柱着岸の時分、船共餘多漕ぎかふ。問はせ給ひければ、勝久は實久に與し、御心替あるなり。伊集院・日置、今宵落去といふ。忠良入道は、是に付けても伊作の如く參らすべきの由ありしかども、供奉の人數詮なきの由、諫め申すに依つて、夜間より湯越をなし、田布施の如く山を越し給ふ。さる間、虎壽殿は、同十五日、鹿兒島を立つて、田布施の如く越え給ひ、幼稚の御心ながら、我は是一言の契約ありとて、卽ち伊作の如く參らる。勝久御對面ありて、父子の儀を以て、存の條神妙なりとて、感涙を流し給ふ、三日餘抑留ありて、十八日、田布施の如く送り給ふ。同六月廿六日、實久奔走を以て、勝久樣、鹿兒島に御入部あり。去る程に、伊作御返事あるべくは沙汰に及ばず。剰へ、實久望み申さるゝの由聞えしかば、會稽の恥を雪がん爲め、同七月廿三〔日ノ一字脱カ〕、田布施の城を、暮程に打立つて、忍ぶ軍路の事なれば、火を灶さず闇くして行きやらず、永泉庵の下に、駒を引へて居給ふ所に、廿三夜の月は、五更の曉をこそ待つに、三更の頃、金峯山小野の邊より、ほ

勝久、東の城内城を陥る

南郷の城を平ぐ

勝久、鹿兒島に入る

のぼのと出で給ふこそ忝けれ。斯くて、石牟禮妙見を伏し拜み、彼の神前に於て、膸の手を放ち、夜半計り東の城内城を攻落す。西の城には、市來衆楯籠りしかども、是も卯刻計り攻平ぐ。天文二年癸巳二月十日、知覽より川邊へ現形あり。桑波田孫六、先約を變じ、鹿兒島になりあるべき時節と、相待ち候所に、翌年三月廿九日、狩の爲め、山に皆々登りたる留主を、白口に走籠り南郷の城を平ぐ。去る程に、同八月十四日、鹿兒島より多勢を向けらるゝを、園田五藤兵衞落ち來つて告知らす。此事を聞いて、貴久は宵より、南郷の城へ籠り給ふ。忠良は、田布施より直に五十騎計りにて、猛勢の跡を遮り、數十人討取り、切捨つる數を知らず。去る程に、山田式部少輔は、前々の過を改め、日置を持參す。霜月二日、知行あり。然れども、桑波田、前の振舞を見るに、後車の誡をなすとて、同廿四日、伊作に於て誅せらる。さて勝久は、御世を悔い、遠く再び鹿兒島に入り給へども、重代の賢貞の臣を賞せず。然して近來讒佞の徒を擧げて厚賞す。或は末弘伯耆守・碇山・竹內・小倉なんどといふ輩、世務を掌〔握ノ一字脱カ〕す。故に政道を正さず。斯くの如くなれば、家國の衰亡遠か

勝久、大隅帖佐に退去

忠良、伊集院の城を陥る

らずとて、御一門河上大和守を始めとして、累代の家臣十六人、連判を作り、實久同意にて、諫議をなすと雖も聞入れ給はず。傾國の基、此輩にありとて、谷山皇德寺にて、末弘伯耆守を討つ。勝久、大に驚き給ひて、夜に紛れて根寢へ落ち給ふ。御一家衆、各〻走參り御入部進め奉る。曾て領掌し給はで、天文四年乙未、人知れずに、鹿兒島へ歸り給ひ、連判の頭川上大和守を誅せらる。其餘の人々、身を遁れん爲め、實久一味になりて、鹿兒島へ亂入、所々在家を放火する間、晝夜七日は、絶えず兵火猛烟空に滿つ。故に勝久は、大隅帖佐へ開き給ひ、祁答院北原を御賴ある間、廻文を以て歎き入部なし奉る。天文五年丙申三月七日、忠良入道殿御父子三人相計りて、伊集院の城を切落す。此由を眞幸へ註進致す間、是入國の基なりとて、御悦は限なし。同九月廿三〔日ノ一字脱カ〕夜、伊集院大和守を武將として、太田原の拵を忍取る。霜月廿八日、土橋勘解由左衞門、長崎の拵に大を懸け、味方に參るべき由、桑波田彌六左衞門・鮫島兩人をして申す。九月廿九日、神殿拵より有屋田關否笠軍衆を引入れ、御幕下に參るべき由を申す。故に忠良入道、彼の地に發向す。本より月はなく、雨

忠良大迫を陥る

忠良、實久と和す

は降り、闇き事前後を辨ぜず。爰に一の瑞相あり。入道殿の左の方に、始めは螢火の如く見えけるが、後には有明の蠟燭程になりて、二つ三つ先立ちけるとかや。稻荷明神の感應なりとて、各〻掌を合せ奉り、同霜月七日、石谷伊賀守御方に參らる。他明くれば、天文六年丁酉正月七日、竹の山の拵を攻めらる。入來院より合力す。同二月、敵、福山の勢を借る事是始なり。肥後助酉、其外名字の者二三人討取る。同月、大迫の拵を攻取る。去る程に、實久衆、鹿兒島谷山に忍ばずして、同七日、女川邊の山越す。同四月上旬、實久加世田へ着岸あり。五月二日、相州・薩州兩家和平となる。是卽ち家を思ひ國を思ふのみ。ある時、忠良、實久に向つて曰、領する所々、伊集院・鹿兒島・谷山・吉田を進めて、守護と仰ぐべしと云々。加世田・川邊兩所を去渡さるゝは、向後の爲めなり。水魚の如く風波なきに於ては、誰人か三州に於て侮らん。實久、誘〔承カ〕引せず、剩へ、祁答院が謀略に同じ。又不和の由、其聞えある間、請太刀になりては叶ふまじとて、天文七年霜月廿八日、入道殿御父子三人、酉刻計り打立の□すはり給ひて、酌の參る時分、蜘蛛落ちさがれり。三人御同前、

忠良、加世田の本城を陷る

加世田新城陷る

是希代の善通なり。〔マヽ〕去る程に、加世田は、追手に五つの搾を取り、用心稠かりしかば、貴久、御舍弟忠將を搦手の大將とし、思ひ懸けぬ內、手に圍まし廿八日寅刻計り、本城を切落す。爰にて、富松左京、大山宮內少輔と引組んて、刺違へて死す。阿多飛驒守、麓より城に籠る大山內藏助、何れも一所にて一足も去らず討死す。殘る所の兵共、新城に立籠り、最後の酒宴し、待懸けたる所に押寄す。鬨を作り數刻戰ふと雖も、叶はずして未明に攻破られ、籠る所の兵三十餘人、枕を竝べて討たれ畢んぬ。同日に、谷山藤左衞門・吉富吉左衞門討死す。爰に相德といふ者あり。妻子を中途迄送りて、其身は又立歸つて、新城に於て討死す。名を惜む志哀れなり。斯くて居たる所に、大寺越前守・鎌田加賀守、川邊・山田の人衆を率ゐ、午刻計り垂の渥迄寄來る。貴久樣卽時に馳出で追拂ひ給ふに、敵軍跡を遮るを知らず、既に危かりつるに、忠將、鞭に鐙を合せて馳せ續き、敵を中に取籠め、前後より攻めける間、市來備後守・大寺彥五郞を始めとして、數多討取る。貴久樣御手の衆にも、市來備後守・猿渡與一左衞門・稅所助十郞・本田九郞・蒲地帶刀左衞門・同名左衞門四郞、其場に討たれぬ。彼の加世田は、祖父河州屍を留めし地なり。今其血を濯いて舊鬱を散ず云々。

苦辛城

神前の城和平

天文八年己亥三月十二日、谷山紫原の軍に、敵餘多討取る。然れば翌日、平田式部少輔、苦辛(くらう)の城へ、貴久樣を申請ぜらる。次の日、本城へ番衆を籠めらる。其より十餘日ありて、廿四日、神前の城俄になりて渡さる。城主駿河守・和泉衆伊集院山城守・松崎丹波守、其外餘多あり。同廿八日、川邊古殿迄、日新御越し候間、高城の人體鎌田加賀守低頭し、少々御手に屬すべき由申し、參上致し、中途に於て御目に懸る。扨其日、高城、新納伊勢守請取られ、鎌田治郞左衞門妻子召連れて、田布施に參る。四月朔日、本城へ日一日ありて、本城平山御手の裏に入る。是又、伊勢守請取る。

大日寺口合戰

去る程に、天文八年己亥閏六月十七日、日新樣御光儀候間、新納伊勢守、大平の咄氣(とき)を作られ申す。同廿七日、大日寺口に於て合戰あり。貴久樣、市來に御發足ありて、平の城に切乘り、其儘居り給ふ。蒲生舍弟宮內大夫同前なり。島津攝津守・梳山安藝守、手を碎き給ふ。蒲生舍弟宮內大夫同前なり。軍參の人々には、入來院石見守、御祝言申上げらる。軍衆少々相殘し、一日の中に歸宅し畢んぬ。佐多半閑齋・〔顯イ〕疑娃・蒲生・種子島、初中終ともに在

陣なり。軍衆馳走の人々には、肝付・根寢・威安・伊地知、同八月四日、本城の野久尾(のくび)に陣付けらる。大將は、右馬頭忠將、軍配人伊集院大和守、諸篇は三原下總守之を沙汰す。同廿八日拂曉に、川上上野守、串木野の城を持參るべきの由、福島名字の者を以て申さしめ、人質として篠原名字の幼童を出す。以上主從三人なり。

新納常陸守降參

然る間、城主新納常陸守、勇氣疲れて廿九日降參す。明くれば九月朔日、本城を請取らる。此常陸守、度々に於て惡讐を作る間、此次を以て誅戮せんと、諸軍鋒を調へ、落往くを待つ。忠良之を聞き給ひて、二心なきは實久の貞士なりとて、却つて新納尾張守・本田下野守承つて、島津越前守・新納常陸守、以上百餘人を船津迄送らる。誠に是恩を以て惡を報いらるか。然れば、大隅の內市成の事、山田式部大輔忠廣より、屋形樣へ先年進上せられ、既に御格護なるを、天文十二年乙巳夏の頃、肝付方忠勤の志、餘儀なきに依つて、同七月、彼の地を給はる。爰に澁谷黨の內、入來院は、今迄度々義兵に兵士を馳せ合力し奉り、或は自ら甲冑を枕とし忠をなす故、貴久公御內緣に定あり、信者德故、公の權威を借り、仙臺郡を領す。加之、前功となして、

入來院反逆

伊集院の內、郡山の庄を宛行はる。其賞に誇り、前忠を費し、內々國を亂さんと、企つる事度々に及ぶ。其罪を誡めん爲め、郡山の庄を沒收せらる。爰に知りぬ。過は必ず改むるを欲せず、剩へ、澁谷黨竝に蒲生・加治木・本田を率ゐ亂を起す。爰に椛山安藝守は、隅州の內、小濱の城にありて、彼の輩に組まず、忠烈の志無二なり。貞臣國の危を見る是なり。天文十一年壬寅三月廿三日、種子島親子義絶に就き、直時根寢方に與力し、軍兵を率ゐ押渡ると雖も、なし難きに依つて、程なく打歸らる。然る所、惠時、頻に貴久樣を賴み奉る間、新納伊勢守を大將とし、面々三十人、都合一百餘の番衆を差遣さる。閏三月四日、坊津へ下り、同六日出船、其夜は硫黃島に着き、次の日、屋久島へ着岸す。惠時、種子島より屋久に落來られ、三島の格護なり難き間、屋形樣へ進上の通[旨イ]、申上げらるゝと雖も、惠時入部の上は、別の儀なしとて、番兵の人衆歸帆の刻、種子島父子、自今以後に於ては、御芳恩の事、忘却致すまじとの神判を進上申さると云々。

忠良、貴久、加治木に發向

天文十一年壬寅三月日、入道殿竝に貴久公、薩摩內の兵を催し、隅州小濱に越し給ひ、加治木城へ向はる。同日日州より北原兼孝勢を率

ゐ、彼の城下に馳來り、御父子に相看して、主客の禮を成す。故に入道殿に酒を進む。先づ盃を擧げ給ふに、蜘蛛あり、〔脱アラン〕來せり。瑞相誠なるかな。十方諸國士無殺不現身豈圖此曠野に於て乘らんとは、大悲念身地をされば、敵强くして、北原周防介・澁谷兵庫助を始めとして、眞幸の軍徒七十餘人亡ぶと雖も、御幕下一人もなくして、悉く歸陣し給ふ。其後、彼の凶徒等蜂起し、此城下に寄來る事數度なり。然る後、入道殿・貴久樣、安藝守に宣ひていふ、天之與時者不レ如二地之利一と云々。其上、勝レ柔抑レ强と謂へり。暫く斯地を凶徒に去渡し、鬱憤を休めしめ、次を以て其御嗳あるべしとて、霜月六日、小濱の城を本田に渡さる。然る間、隅州内の侍士、一人として御家臣ならざるはなし。抑〻此貴久樣は、先年、虎壽丸と申せし時、既に守護の位を得ると雖も、勝久、讒佞の輩に同じ悔還さる。天不義を誡め、道理を助くる故か。貴久樣、再び國を領し給ふ。然りと雖も、謙に居て仁恩を施し、己を責め禮儀に駐る故、未だ守護と稱せず。天文十四年乙巳三月十八日、島津豊後守竝に北郷讃岐守、其外、一家國衆重代の隨臣、各〻衆會して、守護職に補任し奉り、其祝儀をなし畢んぬ。古令尹の政は、必ず以て新令尹に告ぐ。其頃、京都近衛殿より日野左大辨少弼を下され、玉札に相添へ御衣を送らる。則ち守護祝の裝束となす。

近衛家との關係

抑〻當家の曩祖忠久公、三州の守となり、薩府に下向の時、近衛の繼嗣として、源の姓を改めて藤氏となす。今の如きなり。冥符相合ひて、誠に甚深微妙の因縁たりと、此貴久樣の父祖は、當家の統領一家の進士たり。天運の存亡に隨つて家臣となり、權を捨て給ふ事三四代なり。天命此公に落着く。所謂天運循環、往いて還らざるなし。所以風枝を鳴さず、雨塊を破らず、既に多年を經、天文十七年正月日、大隅清水に、希代の逆亂起れり。

大隅清水逆亂の濫觴

倩〻其濫觴を思ふに、呉王、西施を愛して勾踐に亡され、玄宗、貴妃を寵して祿山の爲めに傾けらる。時遷り世變じて、貴賤位を易へたりと雖も、其趣は同じきか。抑〻此本田といふは、當家累代の功臣、隅州の守護代とす。然りと雖も、彼の先祖は、上を敬ひ下を慈む。故に高うして危からず、謙にして吝ならず。此紀伊守に至つては、國郡一分領し、剩へ、嫡子又次郎を左京大夫と稱し、御下知に隨はず。然る間、政道を正さず、朝暮奇物を翫び、民の費を思はず、日夜逸遊を事とす。加

之、利を愛し、他の嘲哢を顧みず、色を重んじ傾國の基を知らず。此故に正月十七日、罪なき伊地知又八を討ち、二月上旬、犯さゞる本田又九郎を誅し、彼を刑し此を罰する事、十餘人に及び、上一人を恐れず、下萬民を憚らず、晝夜に惡行を增す事切なるか。然れば年來の因幡、代々の野口黨竝に郎從數十員が、諫言を加ふと雖も、恰も馬耳の東風を聞くに似たり。然る間、各〻身を退け惡を報ゆるに如かずと、同廿五日他出す。紀州猶ほ未だ驚かず、益〻奢を極め樂を恣にす。偏に宿運の窮まる所なり。去る程に、三月十一日、同名刑部少輔、姫城の城を構へ、上井に組し清水に向ふ手形を出す。同十三日、紀州國の勢を率ゐ寄來る。姫城と清水と對すれば、誠に九牛の一毛なり。何故ぞ、紀州打負け引退く。偏に天罰を蒙り、傾廢すべき事遠からざるか。竊に惟るに、此紀伊守は、去る大永七年丁亥、先君の命を背き、清水に楯籠り、御敵となる。時に八幡宮衆徒所司神官等、各〻御寶前を構へ、御壇と號し、國中の人民同じく籠居す。本田、新納江州衆を引率し攻來る事、度々に及ぶ。佛、靈山にある時、第六天魔王、無數の夜叉羅刹を引き來つて佛敵をなす。和光垂迹に至る

日新入道廿五菩薩像を作る

も、今更此の如きなり。ある時、小家より火起り、魔風忽ち吹いて、神社一時に燒失す。其後、本宮中を一分に領し、徒に人民を勞し、己が私宅を造作するのみ。正宮中に於ては、曾て興隆を勵まさず、吉加嘉祐の破寺に似たり。偶〻一宇あれば、甍落ちて霧不斷香を燒き、扉破れては月常住の燈を挑ぐ。當太守、竊に此由を聞き給ひて、勸進沙門に命じて、神前四足堂を修補せらる。然る間、日新入道殿、端嚴廿五菩薩の面貌を作る。美麗なり。瑞上璽御上眼を整へ、如在の禮奠を致さしむ。抑〻此隅州は、八方に城郭相連りて、防胡萬里城とも謂ひつべし。何ぞ圖らん。姫城より亂を致さんとは、然る間、同廿五日、北原衆、日當山の搆に切乘り、澁谷衆、小濱の城に寄來り、上井より、小村濱の市に放火す。國中一度に燒立つれば、彼三災壞刧の時至るかと、見る人身の毛も彌立つ計りなり。抑〻八幡大菩薩は、當家の氏神なり。就中、太守稽首給ひて、年久しき故、冥感忽ち成り、一社衆の長として、留守桑幡、道賀沙門を以て、御人數を籠められ、宮中を守護あるべき由を申さる。爰に、館下諸卒、各〻相顧みていふ、隅州は海路を隔て、、

小濱城を取る

蒼波遥かなり。其外澁谷、中途を遮る間、此事如何と、人々猶豫する所に、伊集院大和守兵法を窮め、忠を重んじ命を輕んずる〔脱アラン〕韓信・彭越豈□やとて、時日を移さず、同廿五日出船す。其夜は、櫻島の内白濱といふ所に、一夜を明し、翌日宮中に着し、其儘唉隈を請取る。さて其頃、〔本ノマヽ〕不日夜々に當家冥加、靈火、此彼(こゝかしこ)に見え、諸人頗る歎喜申す計りなし。然る後、策を廻し小濱の城、知行を遂げ畢んぬ。是偏に、利欲を貪らざる故なり。本田、此地を澁谷に渡し、叛逆を企てんと欲す。抑〻此小濱は、椛山安藝守在城なり。去る天文十一年壬寅、邪氣を伏して亂を避けん爲め、先づ計りて本田に渡さる。己を退けて人に譲る事は、萬が中に一義なし。忠の至と謂ひつべし。本田、此城を得て御幡下に服し、主君と仰ぎ奉ると雖も、内々は澁谷に組し、國家を覆さんと欲す。積惡の至、豈其身を亡さゞらんや。如今此災に遇ふ。天罰已に彰はるゝか。此椛山安藝守、大和守と共に隅州に發向し、一命を抛つて無二の忠を致され、既に御領地となる。其後、廻敷爾・上井の面々、各〻御方に參り、同北原・清水・姫城一和の調法あり。是を以て、本田を助けんと欲するを以ての

故なり。然るに、運命の盡くる所、曾て承引せず、剩へ、牛禰を肝付に渡し、將に大守を傾け奉らんとす。誠に是、天階に昇り終るべからざるが如く、急流の水沫に似たり。千丈の堤は蟻穴より潰ゆ。故に五月廿二日、大和守、鹿兒島の兵を率ゐ、清水新城を忍取り、即時に本城を攻平げんに、何の難き事あらんや。去り乍ら、本田に當家代々の隨臣なり、如何にして斷ずべきとて、和平の爲め、佐多半閑齋・島津攝州兩人、五月廿四日、唉隈へ討入り給ふ。其刻社家衆、心々の思案出來の間、島津攝州・半閑齋・正宮社頭に於て、此兩人を始め、伊集院大和守、其外、諸侍社家衆以下の者、出家方に至る迄、太守貴久へ二心あるまじく候。神水四足にして之を吞む。其後、北郷讚州、本田助くべき爲め、清水へ山越し逗留中、宮内より數度、使僧を以て談合をなし、殊に曾於郡の事、北原望むと雖も、國の手裏に入るべき事なり。自今以後も、其覺あるまじきの由、之を註(しる)す。同心の間、北郷讚州へ附けらる。剩へ、清水に於て、攝州・半閑齋・新納尾張守・伊集院大和守・社家留主若狹守、廻敷爾・上井・清水よりは、北郷讚州・本田左京大夫を召〔列カ〕烈出合ひ、無事の相談相濟み、日新入道殿、大

隅宮中に御發足あり。北郷讃州に相談ありて、紀州の嫡子左京大夫を召出さる。然る間、上知〔和カ〕下睦陰陽相隨ふべきの所に、程なく北原祁答院に意を寄せ、弓箭を起す。然るに、國中の安危如何あるべしと、諸人皆手に汗を挙る。爰に於て、大和守、籌を帷幕の裡に廻し、八月晦日夜、日當山の搆を忍取る。眞幸よりの番衆平尾張守・白坂助左衞門を先として、宗徒の軍兵百餘人、防ぎ戰ふと雖も、終に其場に討たれぬ。

爰に薩摩の手に、田尻荒兵衞といふ强兵あり。忍手の人衆に先立ち、彼の城に切上り、一人の手に懸け數人を討つ。優劣の輩多しと雖も、事繁き故に、記すに及ばず。

同九月五日、姫城本田刑部少輔、逆心を翻し、御奉公の爲め、鹿兒島の軍を引入れ、眞幸の番兵を討たんと欲す。爰に、荒兵衞は、戰場を拔け上り、高みの家に火を懸く。伊集院彌六・肥後掃部左衞門・稲富左京亮・宮原掃部助・宅萬與八左衞門・池上桑〔業カ〕良・原源八郎・葛原合戰す。敵一所に集り防ぎ戰ふ。然りと雖も、縱ひ網中に罪を犯すとも、何の益あらんやとて、警固を加へ躍堺迄送られ、翌日清水に發向す。然る間、薩隅の軍兵、旌旗に靡かざるはなし。竊に以（おもんみ）るに、此本田は、晉府君の命を背くのみにあらず、神敵となる。夫れ神は、人の敬ふに依りて威を增し、人は神の德に依りて運を添ふ。然るに神祉を燒亡し、年を經、豈長久すべけんや。同四日入道殿、御旛を向けらる。俊鷹大に翥れ鈍鳥跡を潛む。同九日、紀州父子、清水本城を渡し庄内に落去る。年經て住馴れし宿なれば、さてこそは名殘の惜かりけめ。中の間の柱に、一首の歌あり。

　立馴れし眞木の柱も忘るなよ廻り逢ふべき時しありや

と之を見て、誰やらん、

　流れ出て歸る世もなき水莖の跡はかなくも契り置く哉

といひて笑ひけり。其外、一族郎等各〻曉の星の如く分散す。いはゆる不義富且貴、於レ我如二浮雲一。此故に五十年の榮、稀なる邯鄲の枕に依りて、南柯の夢に彷彿たるに同じ。十四日、太守、清水に御光臨あり。薩隅の兩國を治め、慈愛を群類に施し、仁恩を萬民に蒙らしむ。此の如くして日州大平〔半カ〕は、御旗下に服すと雖も、伊東義

貴久、肝付越前守を討つ

祐、山東を領し、日向守と稱し、剩へ、島津豐後守、在城飫肥院に、陣を着くる事、既に六七箇所に及べり。去る間、太守は、隅州清水に坐しながら、伊集院大和守を武將として、飫肥院に發向せしむ。帥の勝負は、勢の多少に寄るべからず、士卒の志同不同にありとて、宗徒の勇士勝つて、三百餘人相向けらる。天文十八年三月十一日、清水を立つて飫肥に發向す。彼方の人衆相談をなし、卯月三日一陣を押落し、敵三百餘人討取る。其外六箇所の陣城、此干戈に當つて叶ひ難き故、次の夜、陣を馳せて悉く逃散す。譬へば破竹の刃に向ひ、諸節一時に解くるが如し。爰に、加治木の城衆肝付越前守、蒲生・澁谷に組し、出仕せざる間、同五月二十日、隅州の勢を催し、黑川崎に押寄せ陣を着けらる。敵軍も亦向陣を取り、堺を隔て去る事、纔に一町計りなり。日々箭師時々鬭諍、見聞く人々、目を驚し耳を動す。爰に伊集院掃部助、霜月二十日餘り、試に敵陣に向ひ火矢を放つ。折節、北風地を卷いて頗る狼藉たり。豈堪ふべけんや。無數の陣舍一時に燒失す。偏に是人間の所爲にあらず、天彼の逆徒を罰し給ふにや。此時に當つて澁谷大に驚き、御一族の北鄕讃州、國の菱刈方

加治木帖佐合戰の原因

訴訟を致さしむ。良將は戰はずして勝つ。然れば太守赦免し給ひ、霜月一日、御陣を開かる。同じく彼の凶徒も、旗を卷き甲を脱ぎ退散す。北鄕讃州、菱刈〔脱アラン〕を先ありて出頭す。加治木父子・蒲生を召出され、澁谷の面々は、各〻親族を出さる。是則ち前遇を憚る故なり。同十一日、各〻清水に謁して太守を拜す。其後、貴久樣、諸黨を率ゐ、直に陸地を經て鹿兒島に還入り給ふ。爰に、彼の輩、〔本ノマヽ〕順日の怨恨を翻し、今朝は家親をなし、或は中路に幕を張り棧敷を構へ、或は嘉肴を調へ珍菓を積み、葡萄酒を酌み太平の曲を歌ふ。如今四海狼烟靜也。不衰ニ紅緑ニ歸ニ帝鄕一と云々。

天文廿三年、隅州加治木・帖佐の弓箭の根本は、祁答院・入來院、連々守護洞に對し、緩怠を致す族なり。然る所に、蒲生も內々澁谷に同意し乍ら、常に鹿兒島祗候し、世間の亂劇を待つ事遍く風聞す。爰に肝付威安、蒲生の心底入魂を問ひ、大守へ御奉公に於ては、神判を捧げらるべきの旨、申さるゝと雖も、蒲生承引せず、澁谷と一味といふ。其に就いて、互に武略調法の儀あり。程なく蒲生帖佐より、加治木

に至り手形を出す。其以後、菱刈・北原も、祁答院を見續く。然れば八月廿九日、澁

同合戰

谷菱刈・蒲生、人數を催し、加治木へ相□の所に、肝付三郎五郎、網懸河に懸向ひ合戰仕り、敵四人討取る。慈(みかた)も日當山に有川新左衞門・柳田左近、加治木に足輕一人討死す。同町口に、清水・宮內・姬城・長濱衆續合ひ、旣に勝負を決し、淸水に市木彥六、長濱に中村舍人討死す。九月十日、敵、加治木に□當作を散らす。又々大隅衆馳續き盡日軍あり。敵一人討取る。長濱に足輕一人越度す。然れば、大隅の弓箭人破に及ぶの刻、肝付威安父子、無二に身上を抛ち忠節を抽んず。故に御成として、同年

貴久、肝付を援く

九月十三日、平松に至り、大守樣御發足なされ、日當比良〔平イ〕を總陣となす。狩集の陣左兵衞尉殿大將たり。兩陣より平松に對し、每日の箭師も言語に述ぶるに及ばず。同十三日、隅州の足將〔輕カ〕早朝西の別府の村々燒拂ふ所に差合ひ、敵一人討取る。慈も淸水に走太兵衞、加治木に竹下外記討死す。各軍衆は、帖佐口に差寄す。敵、岩野原に出合ふ所に、加治木・姬城衆を先として、各〻彼の敵に合戰手を碎き、則ち敵を追退く。加治木に春信房足輕一人、此場に討死す。兩陣軍衆、繁多に依り御陣をな

鬼內吉左衞門討死

す內、逼迫の間、多勢を賦らんが爲め、重ねて又四郎殿大將として、銀の陣衆之を構へ、日々合戰、御勝利なり。爰に鬼塚吉內左衞門といふ究竟の兵あり。黑木七兵衞案內者たる間、岩劒の詰口を、猶以て見極めんが爲め、白晝に城の麓に忍寄る。敵、之を見て跡を遮る間、近づく敵二三人切付く。彼の兩人餘儀なく討死す。就中、同月晦日、平松の麓星原に軍あり。太守樣御父子、駿馬に策打ち給ふ間、軍旅合力を得、大利といへり。爰に三原次郎四郎・大寺大學左衞門・大山織部佐、一命を捨つと云々。同日、星原の軍猛に依り、武衞下知を以て、軍兵多く走せ遣され、相殘る人數にて敵陣を攻めらる。其時、山口太郞次郞討死す。然れば十月二日、平松の軍に於て、帖

帖佐方敗軍

佐・蒲生・岩劒の人數敗軍す。玆には有馬次郞三郞一人討死す。數度の合戰、高きに依りて立ち給ふ。程なく平松の城、御手の裏に入る。其より以後、日夜の軍ありと雖も、差したる事なきの刻、蒲生北村に內通の者あり。中途に於て何某出合相談し、上聞に達するの間、天文廿四年乙卯正月廿二日、屋形樣御父子、吉田迄御發足あり。薩摩の人數出張す。然るに、敵の本意は、不實を構へ慈を亡すべき籌策なれば、味

方の諸卒敗軍す。爰に弟子丸播磨守は、兼日より遁れ難き所を、思ひ取りけるにや、一足も去らず討死す。其外、指宿丹後守・敷根源八兵衞尉・福崎次郎三郎・濱田五藤兵衞・春山太郎次郎・知覺衆名越・池井討死す。此由を開召し、一人の過つても口惜き事なりとて、太守樣・同義久樣、軍場へ度々御馬を懸入れ〳〵、諸勢を助けらる。誠なるかな、兵一人の疵は、大將十所の疵とは、又六郎殿も若年乍ら働をなされ、既に疵を蒙り給ふ。同日大隅の軍勢、典廐に召連れられ、西の原に打上り、簱軍にて御開き候ひ畢んぬ。其後廿八日、溝邊に至り、眞幸衆□をなす。隅州の人

別府川合戦

數、時を移さず續合ひ、敵六人手火矢にて射殺し、一人討取る。三月二日、帖佐、別府川に於て、平松の人衆、大隅の足輕と取合ひ相働き、敵二人討取る。又八も、肝

山田合戦

付三郎五郎、企溝邊・加治木・日當山・長濱を以て、山田に到り、臥陣士仕り、敵廿三人討取る。

茲に加治木に、德永與一左衞門・安田木工允足輕二人、溝邊に一人、長濱に神崎大藏越度す。此軍以後、敵知るを得ず。然る所に、帖佐に於て、別府川の渡御仕役たるべきの由、三月十日、義辰樣御使者として、伊集院治部少輔・野村民部少輔、加治木に渡海し談合あり。此趣を藝州典廐へ披露あり。其より三郎五郎へ相談を以て、正宮へ御神慮を請ふ日限、御定め候と雖も、猶以て評議區々、以の外の所、典廐此の如

帖佐を攻む

き議定の事、更々差延ぶべきにあらず。頻に打立ち給ひ候間、三月廿七日、帖佐へ御働あり。薩摩の人數は、別府川の南、隅州の衆は、岩野原に各〻打寄り、先づ足輕五人數千人を抽き、高干の口にて、敵一人討取り、一人生捕る。其儘帖佐衆、岩野原に追來り、其跡、手の渡瀨を平松南方人衆懸切り、敵八人討取る。隅州の足輕衆差

帖佐合戦

合うて十人討取る。其より帖佐の麓城殘なく垂城戸を破り、放火する事、中にも南方人衆、手を碎き候。寺家に火を懸けざる事は、武衞の下知に依つてなり。是法度を背かざる故なり。其日、島津又四郎殿・島津三郎四郎殿、其外百餘人、岩坂の軍比類なく候。左兵衞尉殿合戰、樊噲が勢に相同じ。其日、清水に野口左京、日當山に逆瀨川七左衞門、咲隈に上田舍人・喜入衆田代助次郎、加世田の手には、宮原源藤兵衞尉・□御同明珊阿討死す。其身の高名は計なしと雖も、諸人之を惜むのみなり。

依りて卯月二日夜、帖佐同新城・山田の拵々を捨て、祁答院の如く落行き候事、當屋形樣・同義久樣、天道御武運偏に凡慮に及ばず奇特なり。則ち北郷次郎殿・肝付省釣・禰寢父子、走せ參られ候。

島津貴久御軍記 大尾

大正五年六月十二日印刷
大正五年六月十五日發行

不許複製

國史叢書 軍記類纂 全

定價金一圓

編者 黒川眞道

發行者 小瀧淳 東京市本郷區駒込林町二二四番地

印刷者 福山福太郎 東京市牛込區西五軒町五二番地

印刷所 福山印刷製本所 東京市牛込區西五軒町五二番地

發行所 國史研究會 東京市本郷區駒込林町二百廿四番地 振替貯金口座東京二七〇二四番

SAN-AISHA SHOTEN
電話神田二九七五番
三愛社書店